

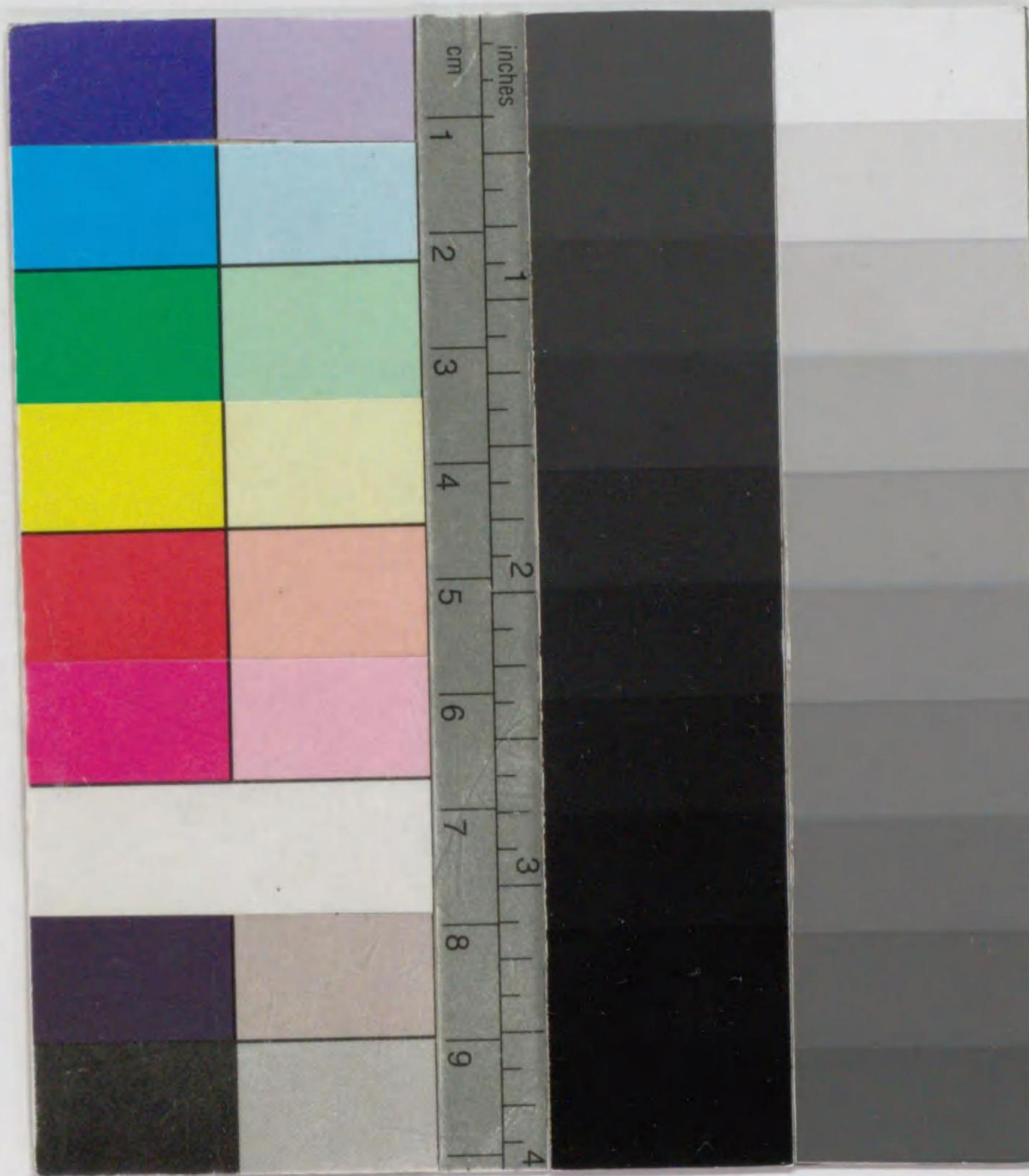
590-161

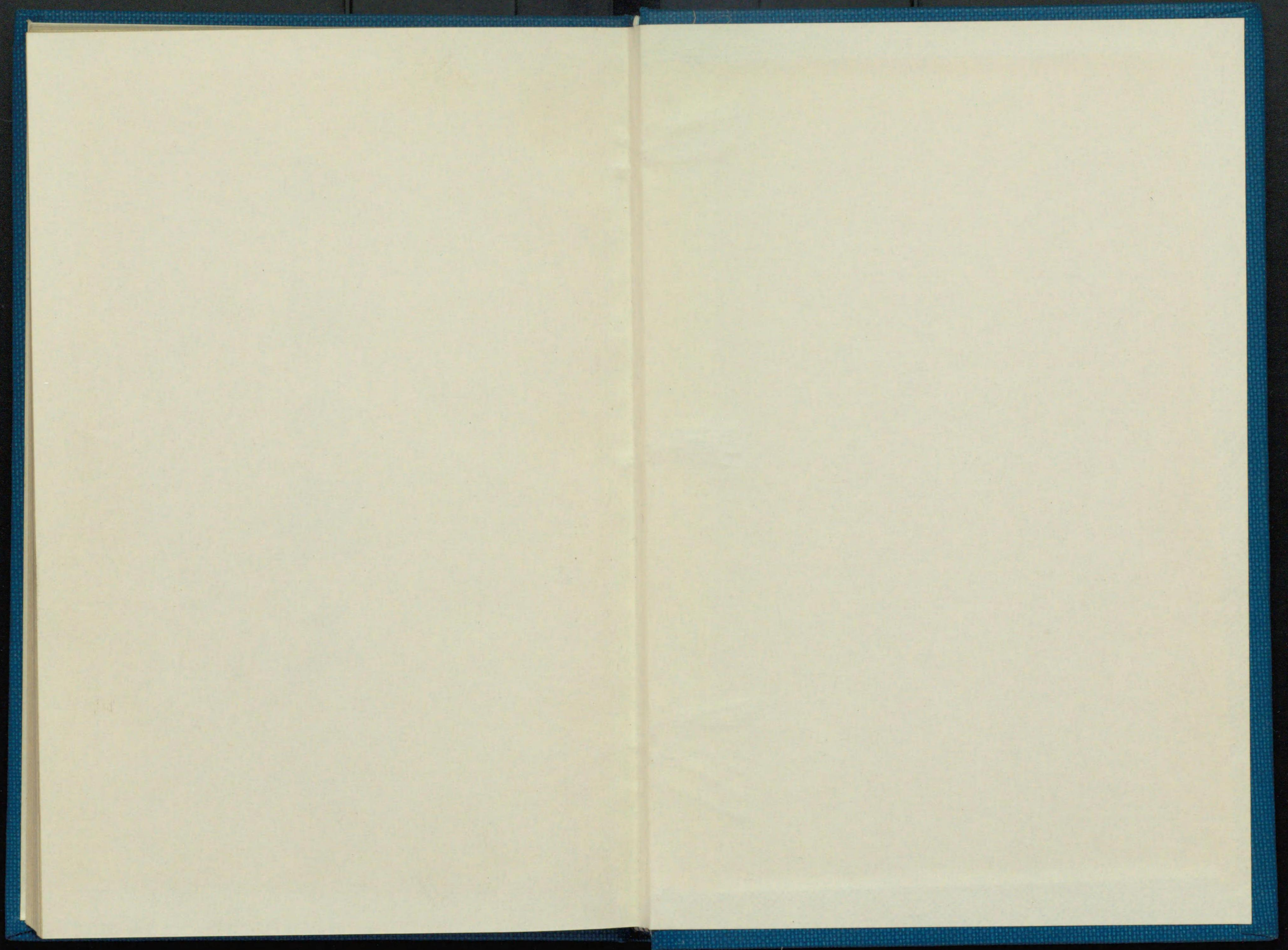


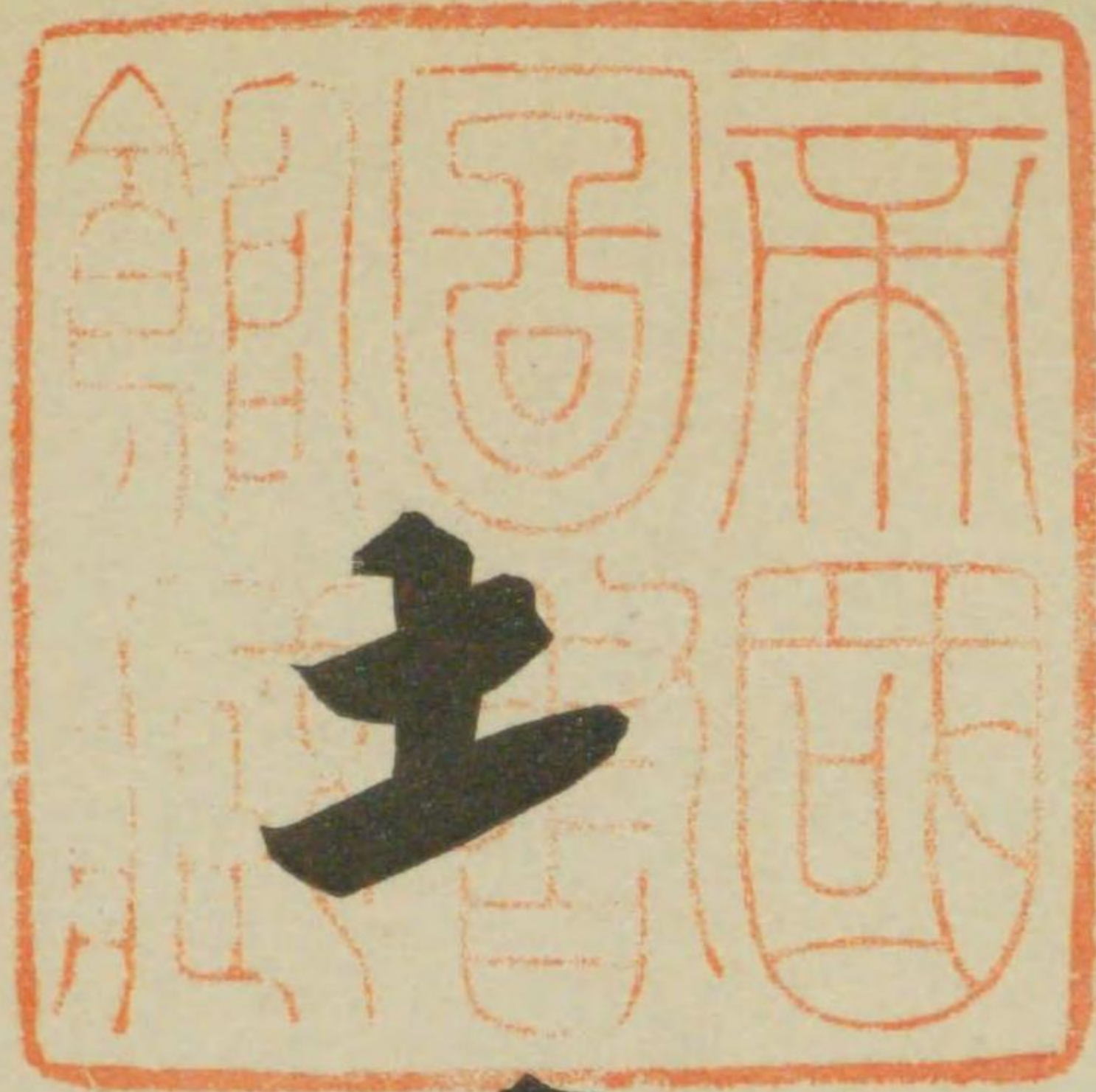
1200501525497

590

61







主
作
の
勤
王



恭しく此書を昭和の
御代に於ける土佐
勤王志士の遺老
田中青山老伯閣下
に奉呈す

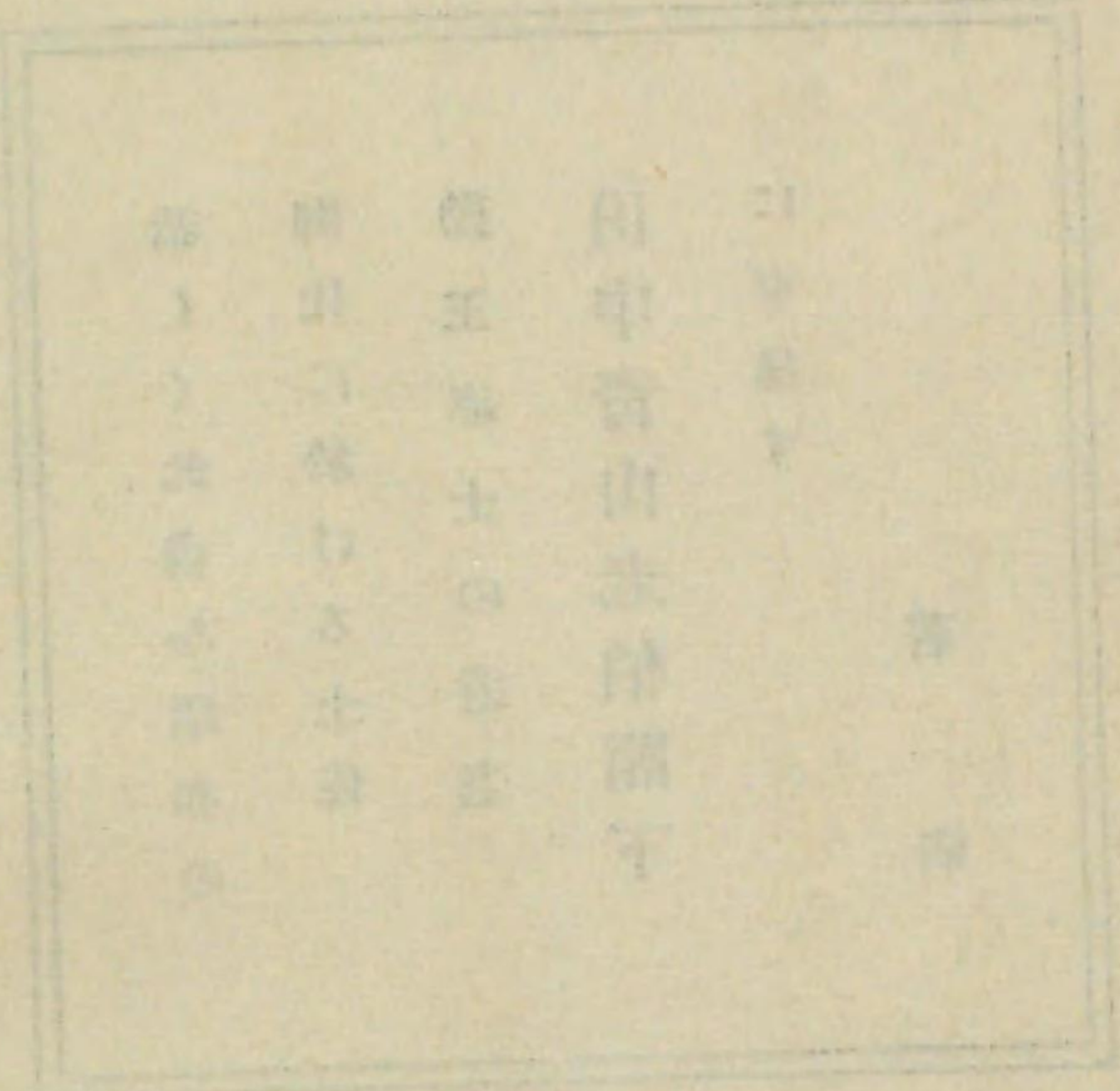
著者

本書を刊行するに際して

日本の各地と云はんよりも、各藩には、二百幾十年の間に、或は有心的に、或は無心的に、或は教化的に、或は自然的に養成し來れる個性がある、今も尙ほ若干それが保存せられてゐる。

* * * * *

此の個性の研究は、歴史家に取りても、社會學者に取りても、文學者に取りても、何れも面白き好題目の一。而して此の個性の研究は、特に維新史の史家に取りては、避く可らず、缺く可らざる必須の要件とせねばならぬ。



一口に薩、長、土、肥と云ふも、薩と長との同じからざるは、猶ほ長と土の同じからざるが如く、薩の肥と同じからざるが如し。固より薩人中にも、西郷と大久保とは同じからず、長人中にも吉田松陰と永井雅樂とは同じからず。土人中にも吉田東洋と武市半平太とは同じからず。肥人中にも、副島種臣と大隈重信とは同じからず。されど其の藩中の人物に於て、斯くの如く、互ひに異同あるに拘らず、各藩には自から各藩獨自一己の個性があつた。而して此の個性の中に、其藩の出身者は、自から一括せられ、且つ一括せらる可き共通性を具有してゐた。

* * * * *

予は土佐の勤王を説くに際し、先づ土佐及び土佐人其物に就て、聊か研究する所があつた。但だ一場の講演なれば、説いて精しからず、語りて詳かならざるは、餘儀なき次第なれども、少くとも其の微旨は、言外に看取せらるゝであらう。

* * * * *

予の所見によれば、土佐人は、最も理窟を云ひ、最も術策を好み、最も深刻である。而して其の或者は専ら理窟に奔り、或者は専ら術策に趨る。然も其の深刻的なるは、多少の除外例はある可きも、概ね皆を同じと云はねばならぬ。

土佐人には一方に於ては、寧ろ理論に拘泥して、頗る融通の利かざる偏屈者があり。他方に於ては、餘りに融通が利き過ぎて、殆んど無軌道に、汽車を奔らするが如き者がある。之を個人的に其の代表者として見れば、前者には板垣伯があり、後者には後藤伯がある。されど中には亦た兩者を一身にて兼ねたるが如き者もあつた。中江篤介君の如きが、其の一人であらう。

予は壯時土佐に遊ぶ兩回、土佐人士と交遊し、聊か得る所あるを覺えた。彼等亦た日本に於ける優秀なる一部の代表者だ。薩

人は其の外無我であるかの如くして、其の内容は、主我である者もある。されど土佐人は、其の人々によりて、小我、大我の相違はある可きも、何れも表裏一徹、自我を暴露してゐる。少くとも此處に土佐人の本色があり、特色がある。

木戸松菊先生と、土佐の容堂公とは、其の晩年に於て、頗る相得た。或時木戸公は私かに公の侍者に向つて、何れの舊藩主も、時世と共に、其の態度が一變したるに、公のみは、相ひ換らずの尊大振りは如何であらうと諷する所があつた。公は之を聞いて、呵々大笑して曰く『大名の癖が、さう急に直るものか』と。

此れは予が會て板垣伯より親しく聞きたるところ。此の挿話を
見ても、土佐人の個性が、能く現はれてゐる様に思はるゝ。

* * * * *
田中青山老伯は、恐れながら明治天皇の最も寵信し給ひたる一
人であつたと承る。而して其の然る所以は、老伯が侃々、諤々、
至尊に對し奉りても、能く其言を罄し參らせた爲めであらうと
拜推する。至尊は復たしも田中の例の一本調子が出たとて、老
伯侃諤の言が、却て御嘉納あらせられたと承る。田中老伯の如
きも、少小より家郷を去りて、脱藩の志士となり、國事に奔走
した。然も土佐人たる特色は、其の始終を通じて一貫してゐる。

今日でも八十七歳の老翁として、其の桂薑の味は、彌よ辛辣を
加へてゐる。

* * * * *
本講演會は、前年田中老伯と會見の際、端なく話題に上りて、
遂ひに土佐志士遺墨展覽會と同時に、青山會館に於て開催せら
れた。但だ不幸にして當日田中老伯は、疾の爲めに、蒲原寶珠莊
に困臥して、來會する克はなかつた。されど老伯の精神は、固
より此會に來り臨んでゐた。予は田中老伯の面前に於て演ずる
心地もて、之を演じた。されば此の講演の成果たる本書を老伯
に獻ずるは、固より予に於て當然の事とせねばならぬ。人各々

所見あり、予の所説は、悉く老伯の賛同を得るものとは期待しない。されど武市瑞山先生を以て、土佐勤王の中心點とするの一事に於ては、恐らくは老伯の意を得たるものと信ずる。

昭和四年六月十四日午前七時半 大森山王草堂に於て

蘇 峰 迂 人

土佐の勤王 目次

前 編

- 第一 緒 言……………一
- 第二 三種の勤王……………五
- 第三 勤王の畑……………九
- 第四 土佐の國風……………一三
- 第五 山内家と其の家來……………一八
- 第六 土佐の藩論……………二三
- 第七 吉田東洋……………二九
- 第八 瑞山と東洋……………三二

目 次

第九 武市瑞山の運動と最期 三八

第十 瑞山の人格及び其の感化 四一

第十一 上士と下士、薩長聯合と大政返上 四六

第十二 土佐の自由主義 五一

後編

第一 那須信吾の吉田東洋要撃始末 五七

第二 武市瑞山と其の餘技 六五

第三 中岡慎太郎の時勢論と與同志書翰 六七

第四 阪本龍馬の人物 八〇

第五 阪本龍馬と薩長聯合 八二

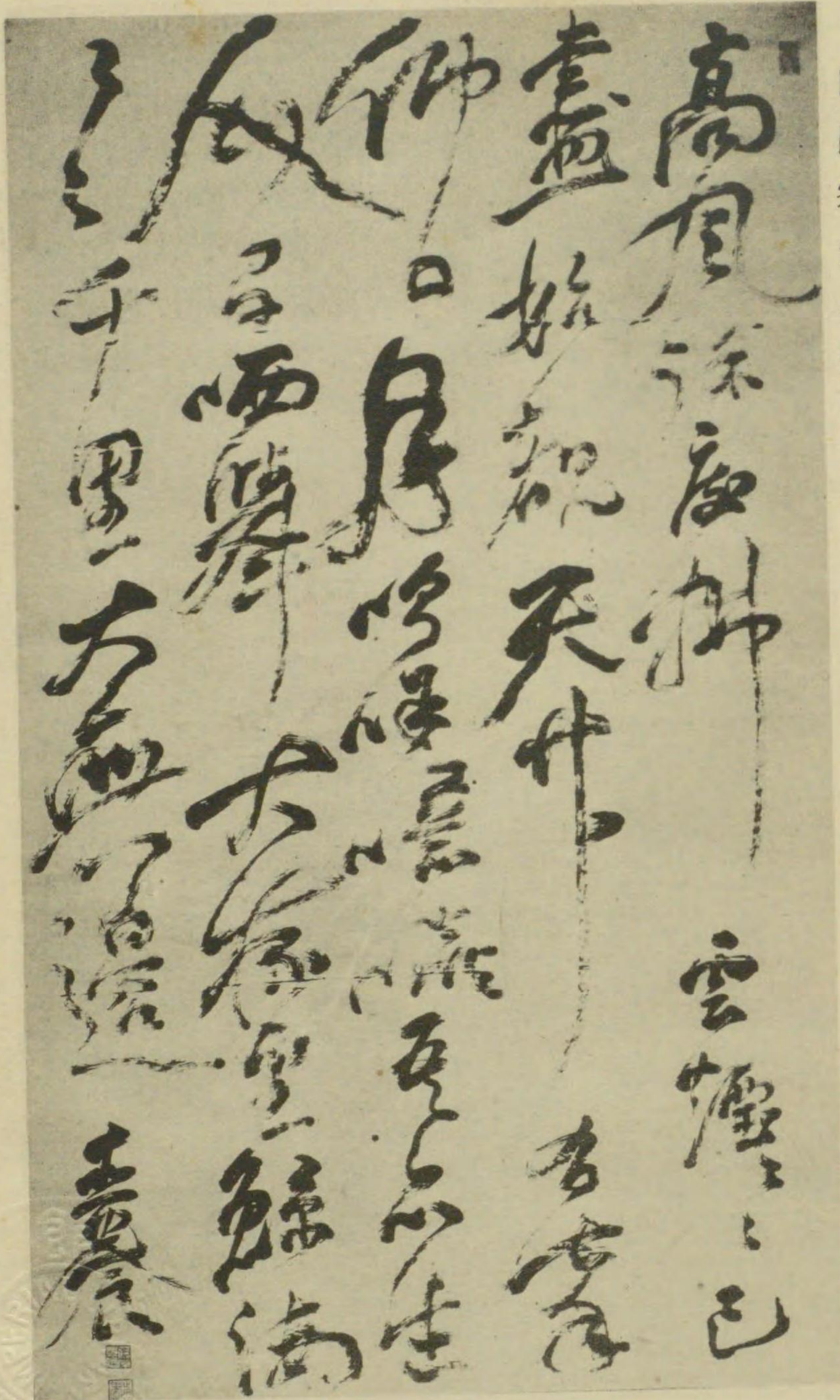
第六 阪本、後藤策動の歸結 八四

挿入 寫眞 眞蹟

- 一、山内容堂公筆蹟 (侯爵 山内豊景氏藏)
- 一、武市半平太獄中自畫像 (武市半平太氏藏)
- 一、武市半平太筆山水畫 (山崎巖氏藏)
- 一、武市半平太書翰 (下村尙美氏藏)
- 一、阪本龍馬肖像 (武市佐市郎氏藏)
- 一、阪本龍馬書翰 (坂本彌太郎氏藏)
- 一、中岡慎太郎肖像 (坂本彌太郎氏藏)
- 一、中岡慎太郎筆蹟 (中岡銈子氏藏)
- 一、吉村寅太郎和歌 (伯爵 田中光顯氏藏)

目次

- 一、平井收二郎筆蹟 (平井良成氏藏)
- 二、間崎哲馬筆蹟 (伯爵 田中光顯氏藏)
- 三、那須信吾書翰の一節 (青山會館藏)



山内容堂公筆

侯爵山内豊景氏藏

武市半平太獄中自畫像

花依清香愛人以仁義
系幽囚片可耻只有赤
心明

培山



武市半平太氏藏



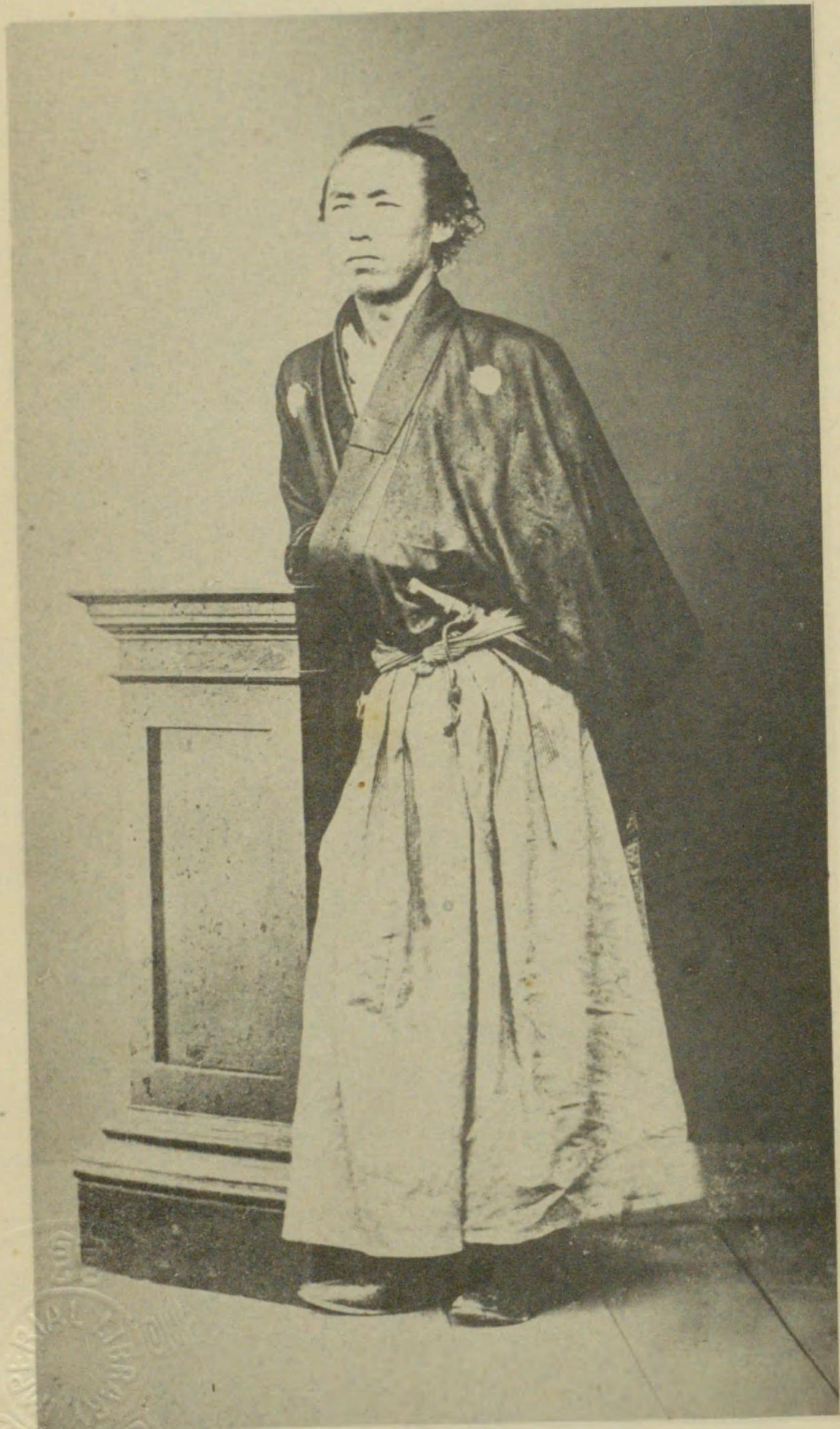
武市半平太筆(山水)

山崎巖氏藏

武市半平太筆(山水)

山崎巖氏藏





坂本龍馬肖像

武市佐市郎氏藏





中岡慎太郎肖像

坂本彌太郎氏藏

坂本彌太郎氏藏



中岡慎太郎筆

中岡銈子氏藏

中岡慎太郎筆

中岡銈子氏藏

新市山林のふは死に後寐見因院
人皆平存是也 玉土泥化巢由勢之
証泉川翁詩 正山山人書

吉村寅太郎筆

伯爵田中光顯氏藏

吉村寅太郎筆
新市山林のふは死に後寐見因院
人皆平存是也 玉土泥化巢由勢之
証泉川翁詩 正山山人書

平井收二郎筆

聞傳忠孝不全終君竭
君王汝竭
為離別多年一相遇後櫻桃
亦原養成功
文久壬戌初冬平井收二郎
應祈賦
限山

平井良成氏藏

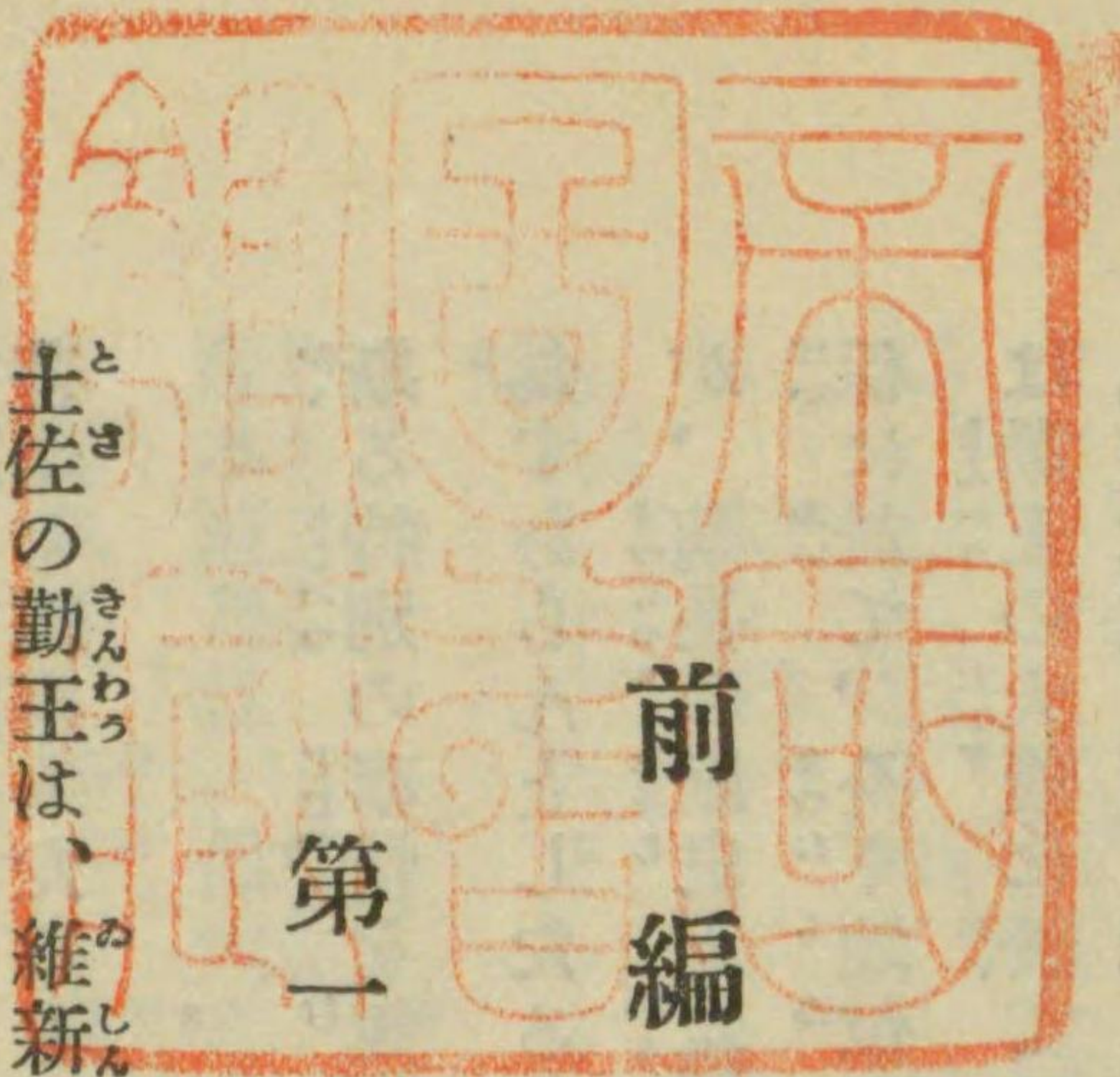
間崎哲馬筆

志大竟
家近
右肩山福南陽之句舞似
誠意何此

伯爵田中光顯氏藏

土佐の勤王

蘇峰學人



第一緒言

土佐の勤王は、維新の史家に取りては、最も検討を要する好題目の一であらう。土佐は思想に於ては最も純粹の勤王主義である。而して境遇に於ては、寧ろ佐幕の桎梏に繋がれてゐる。乃ち思想と境遇との不一致と云はんよりも、矛盾、衝突の間に、土佐勤王志士の運動は出で來つた。

然も深山幽谷の間より進り出づる水が、巖に激し、崖に衝り、千状萬態、其の曲折を爲すが如く。土佐勤王の諸志士は、概ね薩長兩藩士の未だ想ひ及ばざる苦辛を経來りたるものが少くなかつた。

斯る特別の事情を無視し、正々堂々、一藩の力を、勤王に集め、以て天下に向て爲すあらんとしたるは、實に武市瑞山先生の志であつた。彼は其の土佐の歴史が、薩長の歴史と趣を殊にし、藩主山内家が、島津、毛利の兩家と、對幕府關係に於て、全く地位を同らせざるを無視する程の猪武者ではなかつた。然も彼は勤王の大義に於ては、一切の行掛りを超越して、其の藩力を一にし、以て維新回天偉業の先驅者たらん事を期した。

此に於てか彼は其の同志の脱藩を寛容し——恐らくは或る場合には之を懲誦したかも知れない——然も獨り自ら虎口に投じ、夷然として其の素心を渝へなかつた。虎口とは歸藩を云ふ。彼が土佐に還れば、其の危険身に逼ることは、其の親友久坂玄瑞の如き、最も深く之を知り、切に其の脱藩を勧めたが、然も瑞山先生は、其の危きを知りつゝ、歸藩して、最後の努力を試んと企てた。其志も亦た哀しむ可きであらう。

阪本龍馬は、偉大なる、或は尤も偉大なる土佐の産物だ。然も彼は土佐勤王史から見れば、傍系に屬する一人にして、其の首席は必らず先づ瑞山其人に譲らねばならぬ。彼は單に瑞山の風を聽いて起つたとばかり申さぬが、然も瑞山と一切没交渉と云ふのは、決して篤論ではない。

阪本龍馬と中岡慎太郎との協同事業たる、薩長聯合は、實に維新回天史上の最も面白き一齣にして。阪本龍馬と後藤象二郎との合作になる大政返上の幕は、更らに最も華麗なる一齣だ。然も翻て之を見れば、是復た瑞山其人の純粹なる勤王の志業に刺戟せられたるものと云はねばならぬ。若し武市瑞山、前に出づるなくんば、如何なる大策士、大謀士も、到底其力を逞うすること能はなかつたであらう。

予は必らずしも瑞山其人のみを偏重し、尊崇するではない。されど土佐の維新の事功を説くもの、唯だ阪本龍馬其人のみを擧げて、或は瑞山先生を閑却せんことを虞れ、聊か斯言をなす。

予の昭和四年五月十一日、青山會館に於ける講演は、漸く一時間の餘にして、

到底予の言はんと欲する所を謂ひ盡す可きではなかつた。されば之を以て、予の土佐勤王史に於ける全き定説と做すは、大早計を免れない。然も或物は皆無に優る。予は其の不完全の儘、其の筆記を掲げ、天下同感の君子に質すことゝした。希くは予の不敏を咎めず、誨ふる所あれ。

第二三種の勤王

本日は土佐勤王志士の祭典を行ひ、それに就て私が土佐の勤王なる題目に付て、少しくお話を致す事で御座いますが、私は成可く議論に亘ることは申上げない積りで御座います。唯だ如何に土佐の勤王志士が日本回天の歴史に於て大なる働きをした乎に就て、私の觀察致しました事を申上げて見度いと存じます。

人心の同じからざる其面の如しで、維新史に就ても、其の觀察の角度の相違によつて、種々の見解がでて来ります。私は決して己の意見を是として他の意見を非とは申しませぬ。歴史は廣大、歴史は複雑、其の自個の見識のみを以て、唯我獨善と申す可きものではありません。されば私は何等議論に涉らず、唯だ此に少しばかり考へて置きました事に就きまして、申上げて見度いと思ひます。

今日は武市瑞山先生の忌辰で御座います。その忌辰に皆様と共に斯の如き祭典を盛大に催し、而して相共に先生等の成された所の勳しに就て語ります事は、地下の先生等も定めて満足であらうと思ひます。但し私は此の盛會の席に、士佐勤王志士の一人として残つてをられる、八十七歳の田中光顯伯爵が、病の爲めに、お見えにならぬ事を、甚だ遺憾に思ふので御座います。

要するに士佐の勤王には澤山の人物があります。その首脳は何と申しますも、武市瑞山先生であると思ふので御座います。この瑞山先生あつて士佐の勤王家二百有餘の諸君も、その風をさいて起つたのであります。この瑞山先生あつて士佐の殉難の士百餘名がでて来つたのであります。この瑞山先生があつて、薩長に比して、士佐には種々特別の事情があつたにも關はず、その事情を打破つて、薩長と共に維新回天の事業をなし得たので御座います。

士佐の勤王を論ずるならば、どうしても武市先生の事を申さねばなりません。勿論私は士佐の勤王は武市瑞山先生一人とは申しませぬが、その首脳たる人は武市先生であると信じます。私は皆様と共に、この點について、武市瑞山先生に向つて、敬意を表したいと思ひます。

士佐藩が維新の偉業に就て貢献したる事は頗る澤山であります。その貢献の幅から申しますれば、薩長に比して、或は狭いかも知れませぬ。併しながら、長さから申しますれば、却つて長いかも知れませぬ。維新回天の事業を成したものは薩長土肥と申します。然も表立つたる働きは殆ど薩長に限られてゐるもの、様に見られてをります。併しながら士佐の働さも亦た決して薩長に多く譲つてはをらぬのであります。

士佐の勤王は倒幕論の勤王が一つ、政權返上の勤王が一つ、最後に於て自由民権論の勤王が一つであつて、これが系統的に繋つてゐるのであります。個人としては種々の錯綜がありますけれども、その間には自ら一致した系統があり、一定の脈絡があるので御座います。謂はゞ士佐の勤王は、討幕に初まり、憲法制定に終

ると申しても差支ないので御座います。

第三 勤王の畑

如何なる場合に於きましても、播かぬ種は生えないのであります。士佐には本來勤王の種子があります。寧ろ他に比してより多く播かれてゐるのであります。而してその第一は南學であります。これは南村梅軒といふ人によりて發かれたる學問でありまして、この人は士佐の人ではありません。中國から流れて士佐に來た人であります。この人は、程朱の學を、戰國時代に已に講じてゐたのであります。その弟子には、弘岡城主の吉良宣經及びその從弟の宣義がありました。

徳川の初期には佛門より儒學に歸したる谷時中があります。而してその門下には野中兼山、小倉三省、山崎闇齋等があります。山崎闇齋に就きましては、私に今日此で申しますには、餘りにこの先生の志業は大いのであります。この先生は吾が國民的思想の歴史に記憶すべき人でありましたが、今日は申しませぬ。その闇齋の弟子には、又た谷秦山といふ人があります。この人は闇齋の弟子であり、又た闇齋の弟子であつた淺見綱齋の弟子でありまして、我等の親しく熟知したる谷干城將軍の先祖で御座います。

この谷秦山先生は、土佐の勤王の歴史に於て、最も記憶すべきお方で御座います。この人の著述の中に「保健大記打聞」「神代卷鹽土傳」「中臣祓鹽土傳」があります。保健大記は御承知の如く水戸彰考館の總裁栗山潜鋒十八歳の時の著述で、實に堂堂たる史筆であります。而して秦山先生の打聞は、吾々が今日用ひてをります言

文一致體の註釋であつて、實に結構なものであります。讀んで涙のこぼれる程であります。

その打聞の初めに、斯う云ふ事が書いてあります。

吾も人も日本の人にて、道に志あるからは、日本の神道を主にすべし。其上に器量氣根もあらば、西土の聖賢の書を讀て羽翼にぞするならば、上もなきよき學なるべし。

それで吾々は日本人であるから、第一先づ日本の事を學ばねばならぬ。而して餘力があれば支那なり印度なり、他のことを學んでよいとあるのであります。

尙ほ別項に今の學者は西土の國のみ詮索をして、自分の國の事を忘れてゐると憤慨してをられます。若し今日先生をして在らしめば何と云はれるであります。

或はソビエツト、ロシア、赤ロシアの研究のみをして、日本の事を忘れてゐる者も、今日全く無いとは申されぬであります。

この谷秦山先生は種々の點に於て偉い人です。この先生の播いた種子が、土佐の勤王の地盤を作つたのであります。土佐の勤王史上には、谷秦山先生を特筆大書せねばなりません。而してその地盤の中からは、萬葉古義を著したその筋の學問の第一人者鹿持雅澄も出て居ります。而して其人は實に武市瑞山先生の義理の叔父さんであります。武市先生の小楯と云ふ字は、雅澄其人の名けたものであります。

土佐に瑞山先生の如き方が出たのは、決して偶然ではないので御座います。砂原から筍が出たのではありませぬ。筍は必ず竹林に出るのであります。松茸は

必ず松林に出るのであります。土佐の勤王は、勤王の畑があつて、然る後に出で來つたもので御座います。

第四 土佐の國風

私は徳川の鎖國制度には甚だ不服であります。如何なる事にも善い事と悪い事はあります。土佐の鎖國制度は徳川鎖國制度の中に於ても、殊に甚しかつたのであります。土佐には宿屋がなかつたのであります。他國の者を寄せ附くる必要を感じないから、宿屋などといふ機關も設けなかつたのであります。多分維新後までさうであつたではない乎と思ひます。もし間違ひで御座いましたら、後から御訂正を願ひます。

私も少年の時に草鞋ばきで伊豫の別子銅山から土佐に入りましたが、『斯う云ふ所に二度と行くものではない』と思つた程の險路で御座いました。

今日ではさうでもないでありませうが、昔は土佐の天然が自から交通を絶たしめてゐたのであります。これには土佐の守であつた紀貫之なども餘程困つた様であります。御承知の如く土佐日記を読みますれば、貫之は波風ばかりでなく、海賊にまで脅かされてゐるのであります。

かういふわけで土佐は、古から天然によりて鎖され、特に幕府以來は堅く鎖國制を守つてゐた爲に、土佐の國風といふ一種の國風が出来たのであります。土佐の事を昔は健依別と申しました。土佐人は昔から武張つて、文弱ではない。

堅實、勇武がその特色であると申されてをります。

健依別の健は即ち剛健の健であります。又た最明寺時頼の作と稱せられてゐる――

これは時頼の作でない事は確かでありませうが――人國記には、

當國の風俗は極めて眞ありて、氣質すなをなり。土佐、長岡、吾川の郡別て

此風なり。

とあります。これは若干かおまけがありはせない乎と思ひます。若し此の通りであると、土佐の人はまるで聖人であります。

尙ほ此書には土佐の人間ばかりではなく、猿まで素直であつて、藝を教へると、他國の猿よりもよく覺えると書いてあります。兎も角土佐人は、全くこの通りではないとしても、幾分かはこの通りであつたらうと思ひます。

土佐人は能く理窟を申します、能く議論します。曖昧といふ事が出来兼ねるのであります。右なら右、左なら左と、結論から先にやるのであります。妥協など、いふ事は、其の本色ではありませぬ。勿論阪本龍馬、中岡慎太郎といふ人達は、偉い力で薩長を妥協させたのであります。土佐人御當人達は、他を妥協せしむる力があつても、自分達を妥協させる事は上手では無つたのであります。

若し薩長を妥協せしめた様に土佐を一緒にしてやつたならば、薩摩や長州の及ぶ所ではなかつたのであります。唯だ餘りに正直と云へば正直、素直と云へば素直、氣儘と云へば氣儘、各々の意見を餘りに主張したので、折角偉い人が多くあり、折角偉い勢力を養つて置きながら、互に斬つたり、斬られたりしたのであります。

而して斬つたり、斬られたりした餘りが、維新に貢献した人々であります。若し土佐人士が、互に殺したり、殺されたりしなかつたならば、而して彼等が一藩一致して、天下に推し出したならば、それは偉い事であつたらうと思ひます。

土佐のその氣質は何時頃から養ひ得たものでありませう。その委しい事はわかりませぬ。併し兎に角土佐の武勇は戦國時代からあります。長曾我部元親は、天正三年兵を阿波に出し、天正十三年、四十七歳にして四國を平定したのであります。此の十年の歲月は、殆んど同時代に於て、薩摩の島津氏が九州を平定しようと努力したる事と、面白き對照であります。

而して島津も太閤の爲めにやられました。長曾我部も亦た太閤の爲めにやられ

たのであります。秀吉には家康さへも敵はないから、薩摩や土佐の武勇でも、とても致し方は無かつたのでありませう。併し四國の土佐は九州の薩摩と好き一對と申さねばなりません。

第五 山内家と其の家來

山内一豊は初め江州長濱二萬石から遠州掛川六萬石——先程沼田君は、七萬石と申されましたが、それは種々の小口を合せての事であらうと思ひます——それから關ヶ原の役があつた後、二十萬石の土佐國主に封せられたので御座います。これは二十四萬石とも、二十六萬石とも、世間では申しますが、兎も角表向きは、二十萬石といふ事になつてをります。

當時土佐の國主となつた山内家の先祖山内一豊が、國から出て徳川家康に逢はれた時に、家康が云ふのに、

お國は幾程の石高であります乎。

その時山内一豊は、

先づ二十萬石でありませう。

と云ふと、家康は驚いた顔をして、

實は五十萬石位あらうと思つた。それであればこそ荒海を隔てた國を差上げたのである。曾つて長曾我部元親が上方に来て、太閤を御招待した時に、その御馳走振りの盛んであつた事は、とても五十萬石以下の大名では出来ないと考えへたから、五十萬石の積りで差上げた。二十萬石とは殘念至極である。

と云つたと書いてあります。

何れに致しましても山内家は仕合せで御座います。細川家などは關ヶ原の役では大切な奥さんを失ひ、知行を増した事はやつと二倍位であります。山内家は奥さんはちやんとして居られ、しかも賢夫人の名が高くなり、知行は四倍位も増してゐるのであります。本當の事を云へば八倍位は増してゐるので御座います。

かういふわけでありますから、山内家が徳川家に有難いといふ考を持つてゐたのは當り前の事でありませう。御同様でもそれだけの知行を貰へば、必ず有難いと思ふであります。何を申しましても六萬石か七萬石の小大名が、正味を申せば四五十萬石、表高二十萬石の國大名になつたのでありますから、一家は急に一大膨脹したのであります。

家來等は何處から連れて來た乎と申しますれば、第一は掛川衆であります。即ち江州長濱や遠州掛川から連れて來た者共であります。掛川衆は勿論譜代であります。その次には長濱衆、これは元親が吾川郡長濱に居たので、その家來を集めたものであります。これは山内家では外様の家來であります。

それからその次が郷士であります。これは所謂る地方に屯田した様な者であります。元親の時代には、一領具足と申しました。これは熊本では、一領一匹と申しましたが、平生は百姓をして居り、いざ戦争といふ時には武装して馬に乗つて戦に出掛けるものであります。即ち具足一領馬一疋であります。さういふわけで土佐山内家の家來は、幾通りにも別れてゐたのであります。

如何なる藩に於ても、上士と下士の區別があります。維新の大改革は或る意味に

於いて、下士が上士に對する反抗、若しくは擡首と申してよろしいのであります。兎に角下士の方は衣食足らずして學問をし、知識を啓き、艱難以て己を磨き、上士は衣食足つて馬鹿息子が出來たのであります。

それは決して土佐のみではありません。長州、薩摩皆なその通りであります。長州の如きは、伊藤公、山縣公、或は久坂玄瑞等大概下士であります。或中には下士と名付くる事がどう乎と考へねばならぬ人もあります。偶には普通の士分の木戸、高杉もあります。併し概して云へば下士が多いのであります。

土佐もその通りであります。土佐の勤王志士は殆んど郷土、徒、輕輩、さういふ人々が悉くと申しませぬが、多かつたのであります。而してその首領が先程も申し上げた様に武市瑞山先生であり、その中には又た種々の人があります。平井、

間崎、弘瀬、島村、其他何れも下士の人々であります。

阪本龍馬、中岡慎太郎諸先生皆な同様で、而して天誅組の幹部吉村寅太郎先生も庄屋であり、中岡慎太郎も庄屋の子であります。土佐の勤王は實に下士の畑から生え出たのであります。土方伯でも、田中伯でも、決して誇るべき門閥家ではありません。

第六 土佐の藩論

土佐の當時の大勢を一口に申しますれば、第一が勤王討幕論で、これは武市瑞山先生を主とする土佐の勤王黨であります。此の勤王黨を以て私には土佐勤王の核

心とす可きものと信じます。彼等は薩長の勤王黨と擇ぶ所がないのみならず、立派に彼等と聯合してゐるのであります。

その次が公武合體、即ち勤王佐幕黨でありまして、その頭領は誰かと申しませれば、土佐藩主——後に隱居して老公と申したる——山内容堂公で御座います。容堂公は人一倍勤王心を持つてをられました。併し幕府に對する恩義も亦た人一倍感じてをられたので御座います。餘る程勤王心はあつたが、討幕の必要を感ぜぬ方であつたので御座います。

その次は盲目滅法の佐幕黨であつて、これは實に頑冥不靈の佐幕派で御座います。多く門閥家の間に唱へられた俗論で、其勢亦た侮る可らずであります。

土佐には以上申し上げた様な、三つの論があつたのであります。併し藩其物として見ますればその中心勢力は實に勤王佐幕であり、その首領は先程申し上げた如く容堂公であります。而して容堂公は土佐のこの三派鼎立の大勢の統一に、頗る骨を折られたので御座います。即ち一方の過激派は討幕攘夷説を主張し、一方は是が非でも幕府に對して御無理御尤で行かうといふ説でありまして、容堂公はこの兩方の真中に在つたのであります。

一方の馬は此方に行かうとし、一方の馬は又た彼方に行かうとする時に於きましては、真中に乗つてをれば跨が裂けるより外に致方がないのであります。然るにこの兩方を上手く御して——あまり上手いとは申されぬ所もありました。兎に角やつて行つた容堂公は又た偉いお方でありました。

當時の大名の中に於きまして、一寸氣の利いた人は大概養子で御座います。總領は總領の甚六であつて、立派な人物がないとは申しませぬが、甚だ尠いので御座います。中には島津家の齊彬公の如き方もありますが、その他は容堂公であらうと、春岳公であらうと、或は容堂公や春岳公と最も親友であつた伊達宗城公であらうと、皆な養子であつて、他所から入つてその家を嗣いでゐるので御座います。これを見ても當時に於て門閥や格式が、如何に人を愚にした乎がわかるのであります。

當り前で行けば大名になれない人が大名になつて偉くなつた者の中には阿部伊勢守や、井伊掃部頭があり、又た水戸烈公等もその人であります。當今の世の中には養子などは必要がないでありませうが、若し幕府の時代に養子の制度がなかつたならば、世の中は恐らく眞闇であつたらうと思ひます。門閥の弊を調節した

のがこの養子の制度でありました。而して容堂公も亦たその人であられたので御座います。

而して土佐勤王の歴史は極めて露骨に申せば、實に武市瑞山先生と容堂公との交闘史、決闘史であつたと申しても差支へないのでありませう。固より容堂公は君、瑞山先生は臣であります。然も一切を剥ぎ來りて、赤裸々に申せば、全く此通りであります。

然からば容堂公の左右には如何なる人物が在つた乎と申しますれば、先づ第一に吉田東洋即ち吉田元吉であります。私は彼を東洋先生と申したのであります。私は今日吉田元吉といふ人を勤王家として話すのではありませぬ。唯だ土佐の勤王家の事を申しますのに、此の人の事を云はぬと解らぬから一口申上るの

で御座います。

この人は凡有る點に於きまして標準的土佐人でありませぬ。若し博物館に土佐人は如何なる者乎といふ標本を出すならば、吉田東洋先生が恰度その人で御座います。此人は實に土佐人の面目を備へてゐるのであります。

この人は聰明でもあり、極めて學識もあり、辯舌も爽やかであり、文章もよくし、又た經綸の才もあり、而して又た自ら信ずる力も強く、世間では王安石と申しませぬが、文章は王安石よりも拙かつたでありませぬが、政治の才では吉田の方が偉かつたかも知れませぬ。人物の點では前に申した様な立派な人であつたと思ひませぬ。若し今日吉田東洋が生きてゐるならば、政友會の總裁には、最も適當の人であります。

第七 吉田東洋

吉田東洋は十八歳の時に自分の僕を無禮だとして手打ちに致したのであります。それ以來その僕の息子とか親類が、何時仇を討ちに來るかも知れないと考へ、外に出て歩くよりも、家に居て勉強しようと思ひ、一生懸命勉強したと云ふ事であつて、父の買つておいた二十二史を讀み通したといふ人でありませぬ。流石の藤田東湖も彼を人物として迎へて、締交してゐたのであります。不幸にして彼は、東湖ほどの勤王の精神を養はなかつたのであります。

この人の缺點は、管仲流儀の功利主義であります。功利と云ふ事は決して悪いとは申しませぬ。民を濟ひ天下を治めるのも功利であります。併しこの人は餘り

に徹底的にこれをやつたのであります。而して土佐藩に於て如何なる役目をして
ゐた乎と申しますれば、廿八歳の時に郡奉行を勤め、而して卅八歳の時には既に
土佐藩の參政となつたのであります。

然るに安政元年卅九歳の時に、江戸に出て、容堂公の御前で酒を頂いてをりまし
た。その時その席には山内家の親類筋で、松下嘉兵衛といふ旗本がをりました。
この人は小才子風の人で、よく人を嘲弄したのであります。何か酒の上の酔に
紛れて、吉田の頭に一寸手を觸れるか何かしたのであります。處が吉田はこれは
怪しからぬとて、君公の前であるにも關はず、松下を取つて押へて、毆つて毆
つて毆り飛ばし、縁の下まで毆り倒したのであります。

これも若い時ならまだいゝのであります。卅九歳と申しますればいゝ年でありま
す。然も參政として家老の次に座して一國の政治を執る人でありました。それが君
前で、しかも殿様の御親類の頭をなぐりつけたといふのであります。これなどは
實に土佐人の氣質であらうと思ひます。土佐の人を悪く申しますれば、今度は私
が皆様から毆られるかも知れませぬ。

併し岩崎家の先代彌太郎君などもその調子でありました。酒宴の席上では、眼中
大臣もなければ、參議もなかつたのです。板垣伯なども大分自重されて、手を出
さなかつたのであります。怒る事は熾んに怒られた様であります。土佐人は喧
嘩にかけては、誰でも他の何人に對しても、決してひけは取らぬ本性でありま
す。特に土佐人相互に於て最も然りであります。

斯う云ふ譯でありまして、吉田東洋も不敬であるといふ事で黜けられたのであり

ますが、併し兎も角人物であつて、長く黜けられないで、安政五年、四十三歳で再び土佐藩の参政に復したのであります。

而して容堂公を抱き込んだと云つてい、乎、或は又た公が吉田を駕御したと云ふ乎、容堂公と吉田東洋とは君臣魚水の交りをして、共に勤王佐幕を主張したのであります。而して之に對抗して起つたのが武市瑞山先生でありました。

第八 瑞山と東洋

然らば武市瑞山先生は何者でありませう乎。これ所謂の下士出身で上士ではありませぬ。然も何の取柄がある乎と申しますれば、武市先生は江戸桃井家の高足の

門人であり、塾長である。謂うて見ればたゞ土佐の下士から出て来りたる撃劍使ひであります。この人が匹夫の身ながらも、土佐一國の主である容堂公、及びそれを輔くる吉田等と對抗して頭角を表し、宛然一敵國をなしてゐたのであります。

常の人は文王を待つて興ると申しますが、瑞山先生の如きは文王無しと雖も猶ほ興る人でありませぬ。容堂公、吉田、武市、斯る人物が土佐に輩出して、互に争つたのであります。土佐に於ては同じ勤王でも、上士は勤王佐幕であり、下士は勤王討幕であつたので御座います。勤王は勤王でありませぬが、幕府を倒して勤王をする歟、幕府を倒さずしてこれをなす乎。瑞山先生の如きは、決して犬の遠吠をする人ではなかつたので御座います。先生は長州の久阪玄瑞や、薩州の樺山三圓やと相ひ圖り、飽迄勤王單本位で進んだのであります。先生の眼中には、徳川幕

府は無かつたのです。

瑞山先生は容堂公に對しても、吉田東洋に對しても、膝詰めの談判を致したのであります。然るに吉田はこれを鼻の先であしらつてゐました。

お前さん達が何の見識も無い青公家等を味方として、倒幕論を云つたとて、ものになるものではない。吾が山内家は他とは家柄が違つてゐる。薩長の眞似などの出来るものではない。山内家の爲にも、お前さん方はもすこし反省しなければならぬ。

等といふ事を申したのでありますから、問題は茲に一轉して、

この漢の居る間は土佐の勤王は到底物にならない。何か工夫はあるまい乎。

といふ事になり、「それではやつつけよう」。——今日の言葉で申せば、直接行動の外に方法はない。「それはそれがよからう」といふので、やつつけたのであります。

それをやつたのは田中伯爵の叔父に當る那須信吾君及び安岡嘉助、大石團藏の三人でありました。恰度那須信吾の此事に關する書付等も、別室に展覽してありますから、よく御覽になればわかります。

而して吉田東洋が殺された様子も亦た實に不思議であります。山内容堂公が如何に山陽を愛した乎は、展覽會にある公の揮毫を見てもわかりますが、公の書いたものは、殆んど全く山陽に幾いので御座います。或は山陽よりも上手い位で御座います。その位山陽を愛してられたのであります。而して吉田東洋も亦た山陽好きであつて、日本外史を、東洋先生自ら豊範公に進講してゐた程であります。

その晩も日本外史の進講があつて、それは恰度文久二年、先生が四十七歳の四月八日であります。日本外史の信長記の本能寺の件を進講し、それが終つて酒を頂

戴して歸られたのであります。その進講を陪聽した者の中には、後藤象次郎伯爵や、福岡子爵などもあつたので御座います。

吉田東洋先生はその子分とも云ふべき者や、門下生などを引連れて歸つたのであります。途中から別れて、自宅の帯屋町に近くなつた時に、雨が降り、午後十時半頃でありましたが、待伏せして、前に申しました様に那須信吾といふ田中伯爵の叔父様が斬りつけ、傘越しに肩を少し傷つけられましたが、遂ひに安岡、大石三人でとうとう首をとり、那須氏がその首を下帯に吊して携へたが、犬が吠えついで困つたと、同氏の手紙に書いてあります。

世の中には種々不思議な事があるもので御座います。信長の殺された時は四十九歳であり、信長記を進講した吉田東洋の殺されたのは四十七歳であります。氣性

も信長と東洋は似て居たのであります。私は其の死期の相近きをば、實に不思議な事であると思ふのであります。

扱て吉田東洋を殺して、佐幕勤王の巨魁を斃したので、一時勤王討幕派が勢ひよくなつたのであります。無理をした仕事には何時か缺陷が表はれるものであります。東洋先生を瑞山先生の子分が殺した事は、他日東洋先生の子分が、瑞山先生を殺す様な結果になつて行つたのであります。

これは寔に小説か芝居の様で、因果應報とでも申しませうか、何とも云へませぬが、殺したのも、殺されたのも、私の恨ではなく、天下國家の爲であるとは云へ、寔に遺憾な事で御座います。若し瑞山と東洋の二人が手を握つてやつたならば、殆ど天下に敵無しであつたらうと思ひます。併しかうした都合のよい事は、

學者が机の上で申す事であつて、實際の政治は決してさう行くものでないので御座います。『儘にならぬが浮世』と申しますが、全くその通りであります。

第九 武市瑞山の運動と最期

今此に瑞山先生が同志を集めた文章を一言讀みます。これを讀めば、瑞山先生が京都と江戸の間を奔走して、薩摩、長州、土佐三藩の力を合せて、勤王の大義を行ふ事が、瑞山先生の素志であつたことが判ります。

乃ち斯う云ふ事が書いてあります。

堂々たる神州が夷狄の辱しめを受け、古より傳はれる大和魂は今既に絶

えなんと、帝は深く嘆き給ふ。然ども久しく治まれる御代の因循萎縮といふ俗に習ひて、獨りも此の心を振ひ擧げて、皇國の禍を攘ふ人なし。

かしこくも我が老公（容堂公）夙に此事を憂ひ玉ひて、有志の人々に言ひ争ひ玉へども、却て其爲に罪を得玉ひぬ。斯く有難き御心に在しますを、など此の罪には落入り玉ひぬる。君辱しめらるれば臣死すと。況んや皇國の今にも衽を左にせんとするを他にや見る可き。彼の大和魂を奮ひ起して、異姓兄弟の結びをなし、一點の私意を挾まず、相謀りて國家興復の萬一に裨補せんとす。

錦旗一たび揚らば、團結して水火をも踏むと爰に神明に誓ひ、上は帝の大御心を安め奉り、我が老公の御心を繼ぎ、下は萬民の患を拂はんとす。されば私も何かくと争ふものあらば、神の怒り罪し給ふを待たで、人人寄つどひて腹

切らせんと、おのれ〜が書きしるしおさめおさぬ。

文久元年辛酉八月

先生が内は土佐の同志を纏め、外は薩長、其他諸藩の志士と提携し、朝幕の間、京都と江戸とを股にかけて、周旋奔走せられたる顛末は、今茲にくどくしく申しませぬ。然るに瑞山先生は文久三年四月四日に歸國し、此の歸國には、親友の長州の久阪なども頻りにとめました。而して暫らく長州に身を托せんことを勧めました。然も先生は之を聞かずして歸りました。

同じく九月には牢に押込まれて居ります。而して慶應元年の五月十一日に切腹を仰付けられて、行年卅七歳にして、其の雄魂毅魄は此世を去つたので御座います。前にも申し上げた如く吉田東洋が殺されたのは四十七歳であり、瑞山先生が切

腹仰付けられたのは、實に卅七歳の時でありました。

第十 瑞山の人格及び其の感化

武市瑞山先生は、土佐には珍しい——と申せば只今此の場所に居られる土佐出身の諸君に、失禮に當るかも知れませぬが——抱擁力の深い人であつて、人と喧嘩などをしたり、怒つたりする人ではありませぬ。先生は實に人を吸ひ寄する力を持つて居られたのであります。古人が申した通り、深沈重厚是れ第一等の資質とは、全く先生を稱する文句でありませう。

阪本龍馬とか中岡慎太郎といふ諸傑は、誰にも滅多に感心したり、敬服したりす

る事はなく、誰の手にも合はなかつたので御座いますが、瑞山先生の言ふ事は、悉く聞くとは申しませぬが、兄分として立て、居たのであります。否な凡そ土佐の勤王家は、悉く武市先生を中心として出で來つたのであります。

斯く瑞山先生は門閥もなく、格式もなく、只だ個人的の感化力もて、土佐の勤王家を結合し、これを指導せられた點は實に偉いのであります。瑞山先生が若し死ぬまいとするならば、その方法は幾何もあつたので御座います。

現に文久三年四月容堂公が國に歸られる時に、「半平太も來い」と云はれたのであります。これを聞いた瑞山先生の親友久阪は前にも一寸申した通り、

これは危険である。國に歸れば因循派が勝を占めてゐるから、さうなれば貴君の身體が危険い。せひ長州に脱藩して來て貰ひ度い。脱藩して來さへすれば後

は吾々が引受けるから。

と頻りに勧めたのでありますが、先生はこれを聽入れなかつたのであります。

かうした點は瑞山先生も亦た土佐人であります。

自分が歸つて藩論が一定すればよし。もし一定しなければ自分は死をも覺悟してゐる。

といふ右乎左乎と云ふ義務觀念を持つて、久阪其他の親友の言を斥けて歸國し、而して自分の信ずる所を堂々と論じたのであります。然もその結果、先生は遂ひにやられてしまつたのであります。

武市瑞山先生は腮といふ綽名があり、墨龍先生と呼ばれてをりました。それ程腮が人並外れて出づ張つて居ました。墨龍とは墨繪の龍の如き容貌と申す意味かと

思はれます。樺山三圓は瑞山先生を西郷に似てゐると云ひ、久阪は又た西郷以上であるとして申してをります。先生は前にも申した通り勇の人であると共に、又た徳の人でありました。勤王黨の首領として寔に適當なる人物であつたのであります。先生の獄中の作に、

世を思ふ心の足らでかゝる身は

隙洩る月の影も恥かし

人の目に見えぬ心の増鏡

清き光は神ぞ知るらむ

とありますが、以てその人格を想ふ事が出来るのであります。

武市先生の事を一々申上げれば、時間が長くなります。又た一緒に働いた人々に就て一々申上げる時間もありません。併し瑞山先生及び先生を擁したる百九十幾



人の勤王家は、實に土佐の光りを成す人々であつたので御座います。この人々のやつた事の爲に、土佐は薩長二藩に向つて、或は天下に向つて、「吾々もかういふ事をやつてをる。」と云ひ得るので御座います。それ以外の事はエキストラ、即ちおまけであり、景物であります。その景物も又た大いのであつて、世間に於きましては、本物よりもこの景物が大きく、特に其音が大きいのでございます。

何れかと申しますれば武市瑞山先生の勤王討幕は、其志未だ達せずして斃れたとは申しませんが、然も大政返上なども亦たこの本原から出た景物と私は見てをります。誰も同じ観方ではありませぬ。併し私の様に観る観方もあるといふ事を、御承知置き願ひ度いのであります。

第十一 上士と下士、薩長聯合と大政返上

上士の中にも時勢の推移と共に、板垣退助とか小笠原唯八とかいふ人々の議論は勤王討幕に傾いて参りました。

然るに下士出身の平井隈山、間崎滄浪、弘瀬健太などが、中川宮の令旨を奉じて國に歸り、藩論を一定せんとして佐幕派に忌まれて捕へられた時、唯八が申すのに、

この事件には二つの論がある。下士の方では忠良の士を殺す事は宜しくないといふ、上士の方では輕輩が出しやばると、國の綱紀を壞る事になるから、制裁を加へよといふ、これが上士の論である。自分は目付の役目であつて、どちらかといふと、上士の云ふ様にする外はないと思ふ。

と申しました。而して當時の藩命にて、遂ひに三人に切腹を申付ける事になつたのであります。此の如く上士と下士との軋轢は、同じく討幕勤王主義者の間にも存在しました。

但だ戊辰の間際に至りては、上士勤王黨の首魁たる板垣伯は、上士の勤王と下士の勤王とを糾合して、土佐を出で、之を率ゐて東征の途に上りました。而して此の上士下士の勤王軍は、中山道を通つて江戸に著し、それから野州から長驅して會津まで行つたのであります。而して其の以前、所謂伏見鳥羽の戦争には、土佐兵は、容堂公の命でなく、寧ろ藩兵其者共の了見で参加したのであります。然もそれが今日まで、薩、長、土、肥と同列に謳はしむるの原因となつたのであります。

私がこの際一言申し上げたい事は阪本龍馬、中岡慎太郎の兩君の事でありませぬ。この兩君は實に不思議でありまして、中岡慎太郎も薩長聯合に骨折り、阪本も薩長聯合に骨折つてをります。阪本は勿論中岡も亦た此事には重大なる役目を勤めて居ます。此の兩人の維新史に於ける功は、九鼎大呂よりも重しと申しても差支ありません。然るにこの二人の見識は違つてゐるのであります。

阪本龍馬は平和解決論者であり、中岡は武力解決論者でありました。而して中岡は板垣伯と提携し、阪本は後藤伯をとらへたのであります。後藤伯は吉田東洋の弟子であり、且つその姪であります。中岡は「武力解決だが合點か」といふ事で板垣伯と手を組み、阪本は後藤伯に「大政返上はお前さんがおやりなさい」といつて後藤伯と手を握つたのであります。

而して後藤伯と板垣伯は親友であります。板垣伯と後藤伯は年中喧嘩をしてをり、子供の時から喧嘩相手でありましたが、いざとなれば實に仲が良くなつたのであります。中岡と阪本も一方は陸援隊、他方は海援隊の長として、仲が良く遂に死を共にしたのであります。即ち慶應三年十一月十五日の夜、京都河原町の近江屋にて刺客の難に罹つて阪本は卅三歳にて、中岡は卅歳にて枕を並べて逝いたのであります。

この四人は違つた事をやつてをりますが、意見が違ふと云つて絶交する事なく、意見が違つても志が同じであるから、何處でか一緒になるのであります。此の青山會館から左の道を行つても明治神宮に著し、右の道を行つても明治神宮に著します。各々違つた道を歩いて行つて、ひよつこり明治神宮の前で逢つて、

『やあ君來た乎』

『君も来た乎』

といふ様な事になります。

喧嘩をすれば、互に殺したり、殺されたり、切腹させたり、切腹させられたりする様な事になるのであります。これは困るのであります。土佐はこれに庶幾かつたのであります。それでよく人を殺してをります。土佐人の中でも少からざる脱藩者がございます。田中伯などもその一人であります。楚材晋用といふ言葉があります。土佐の人は時としては薩摩の芋畑を肥し、時としては長州の蜜柑畑を肥してゐるのでございます。時としては天誅組とか、高野山の義擧とか、其他凡有る方面に活動してゐます。

要するに土佐の働きを帳面の上だけで見るならばそれは狭いので御座います。時

としては土佐の働きは長州の働きに化け、時としては薩摩の働きに化け、其他各方面の働きに化けてゐるのであります。若し公平に土佐の働きを申しますならば、それ等を合せ申さねばならぬと思ふのであります。それをすつかり合算するならば、土佐の勤王は、薩摩や長州の働きに決して劣らぬと確信するのであります。

第十二 土佐の自由主義

猶ほ種々申上げ度い事があります。併し大分時間も過ぎましたから、薩長聯合やら、大政返上などといふ事に就ては、詳しく申上げませぬ。此れは寧ろ世間に能く知れ渡つてゐます。最後に一言申して私の話を終り度いと思ひます。

土佐の自由主義に就きましては、先程沼田君より、山内家には會議とか、入札とか、選舉とか申すことがありとの話を承りました。更に私に云はしむるならば、土佐の自由主義は、スペンサーやミルやの論から來てゐるのみではありませぬ。この事に就いては、私は親しく板垣伯から聞いた事があります。

それは會津戦争の時に、二川元助——後の男爵坂井重季——の處に會津の百姓が芋を持つて來て、

これは寔につまらぬものであります。貴君方から君公に差上げて下さい。と云ふ事であつたので、『それは奇特の事である』と云つて、隊中一同感嘆した時、板垣伯は、

それは奇特な事であるが、もし會津が上から下まで一致して防いだならば、吾

吾が斯の如く、容易に戦功を收められなかつたかも知れぬ。城を守る者は士族のみであつて、一般の者は逃げ隠れて居る。中には金をやれば我々の爲に働く者さへもある。すべての者、老人も若い者も男も女も心を一にして敵を防いだならば、城はさう容易に陥るものではない。日本國もその通りである。只だ武士とか大名のみが日本を守るといふ事は間違ひである。この先はどうしても一君萬民でやらねばならぬ。上に天子を萬民が戴いて、格式とか門閥を廢し、一致協力して國を守らねばならぬ。

というたとの話を、今から四十餘年前に承りました。

故に土佐の勤王は尊王討幕論から、自由主義となり。門閥全廢、封土返上、公議政體樹立、憲法制定、立憲政治でなければならぬといふ事になつたのであります。土佐の自由主義は必ずしもルウソウの『民約論』からのみ來た自由主義であ

るとは申されぬのであります。私は此處で板垣伯を辯護するといふわけではありませぬが、板垣伯は實に勤王家でありました。如何なる場合でも、皇室の事を話すと、肅然として襟を正されたものであります。

曾つて板垣伯が明治十五年四月、岐阜に於て刺客の難に罹つた時に、當時二十六歳の名古屋病院長であつた後藤伯が往診の際、お上から御見舞が來るとの報が來た。その時板垣伯は病床に其の態度を改め、布團からすべり落ちて有難くこれをお受けしたといふ事を、後藤伯は其の實見の儘、之を私に語られた事があります。

勿論自由主義者の末流に至つては、或は歐米の糟粕を嘗めた者もあるであらませうが、その原因は遠く谷秦山先生及び武市瑞山先生等の勤王主義に溯らねばな

らぬものと思ひます。然るに後來一方は谷將軍その他の勤王主義者あり、一方は板垣伯等の自由主義者であります。『貴様は專制政治論者だ』『いやお前は頑固だ』と云へば、他方では『貴様は過激だ、共和論だ』などと云ひ、互に相ひ反目したのは、互に其末に走りて、本を忘れたものでありませう。結局土佐の自由主義は土佐の勤王主義から來て、その源を同するものであると観る事が、最も公平なる觀方であらうと思ひます。

要するに土佐の勤王は、討幕、大政返上、憲法制定、立憲政治の樹立まで、長い道を一貫して今日に來たのであつて。殺した人も、殺された人も、容堂公、武市瑞山、吉田東洋、及び阪本龍馬、中岡慎太郎、吉村寅太郎、平井隈山、間崎滄浪その他勤王の節義に殉じた土佐勤王の志士は、今日に至りては、互に各々がその目的とするところを遂げ得た事に満足するであらうと信ずる次第であります。

土佐の勤王論は實に一番の力よりも寧ろ各個人の自發的であり、而してその効果は長くして且つ遠いので御座います。

昭和四年五月十一日 青山會館に於て。

後編

前編は一場の講演を筆録したるものにして、固より予の所見を悉さず。然も之を悉さんと欲せば、一部の土佐勤王史を編せねばならぬ。是を以て、姑らく前編の意を補ふに足る可き資料若干を後編として、敢て天下識者の誨を乞ふとした。

第一 那須信吾の吉田東洋要撃始末

別記は吉田東洋を要撃し、其の目的を達したる一人、那須信吾君が、其の養父那須俊平君に其の出奔先より寄せたる密信である。之を讀めば當時の事情歴々、之

を指上に把るが如く、其の委曲を盡してゐる。

極密人前は御無用

當春本間精一郎禱原え参り候節、天下之時勢委敷承り、實は私儀佐川え参り候、杯と申、度々出府仕り、有志之人に付合、政府之事を態々聞合、其往返鼎公えも計り、何分此頃之時勢、其三大奸物、旁以元吉を退役爲致不申而は、勤王之事は、申間敷と申事に至り候、不得已は刺除くべくなれ共、成丈け者平穩に退役爲致候得ば、靜謐に事足り候とて、大學様、雅樂助様、民部様、其外御家老中、頻に御世話被遊候得ども、御力に及び不申、終に四月朔日、彌刺候に極り、同志之者共毎夜、場合を伺ひ候處、既に八日夜機會を得、猶又同志共能々盟をなし、其内首受取獄門に掛け、且私共荷物を持候者共十人斗、四半橋觀音堂え廻し置候。扱最早夜半前登城之歸りを、

東洋斬殺の模様

私共七八人帶屋町に而待受、先づ私後首を見込、唯一打と思ひ刀を下し候所、傘に障り淺手に而、彼の者直に見返り抜合、聊切合候所を外方段々手を下し、否切伏せ直に私首を取り候内、餘は觀音堂え引取申、其首と刀を側之小溝に而洗ひ、用意之下帶に包み、唯一人帶や町、南奉行人町通り、西え参候所、毎々犬にはへられ、既に首え喰ひ下り可申程近寄、大に迷惑仕候得共、此何敷無難に觀音堂え持付、同志に相渡し安堵仕、夫々寛く荷物手籠等受取、旅支度取調、乍暗夜一同懇に暇乞し、且又於京師機會を待、死を共にすべき事を約し、西に向ひ候所、今こそは父母の國を去る之期也、又再生而歸る事も覺束なしと思ひ、竊に涙を拭ひ、大石團藏、安岡嘉助と三人、しほしほと暗地を步行佐川着、同地にて夜明に相成り、越知通り御嶽を越し、晚影別枝之關を忍び抜け、伊豫の内久万山岩川に而一宿、翌日は漸久万町迄参り止宿、其翌十一日未明馬乘に而打立、松山城下え晝過ぎ着、夫々步行に而七

三人しほく步行

つ前三つの濱え着、幸なるかな直に出舟有之、直様打乗り、十五日諏訪之内
 美田尻に着岸上陸、宮市と申所に而止宿、十六日下ノ關に着、吉村寅太郎、
 且長薩之模様尋候所、皆々頻に上京と申事に付、便船を待中二日滞留、
 十九日出帆、廿四日暮頃讃州多戸津の湊に掛り、乗合共六七八人象頭山に參詣、
 右湊の三里斗也、深更金比羅町備前やに着、聊酒を命じ旅疲を慰居候内、
 早篠の目に相成、直に登山、家内安全を伏拜み、夫引返し、晝頃多戸津に歸
 り否出帆、廿七日篠の目兵庫和田岬え入港上陸、夫歩行に而寛く古戰場湊
 川邊を詠め、楠公之御廟に詣、武運長久を敬白し、其夕部大坂泊り、廿八日堺
 え參り、住吉土州御陣屋詰同志に忍逢、其夜住吉止宿、廿九日大坂え歸り、淀
 舟に而上京、長州有志え面會同居致候内、追捕頻りに烈敷相成、長藩有
 志の薩之同志に頼み相成候所、直に島津三郎様え之聞に入り、五月十六日薩
 之同志海江田武次、吉井中助兩人之旅宿え引移り居候所、廿二日三郎様御東

淀舟にて
 土京長州
 邸より薩
 州邸へ

御丁寧の
 御扱ひ

下に付、右兩人御供に而候得ば、外輪旅亭に而は不工面に付、廿三日御邸内え
 入る、誠以御丁寧之御扱實驚入候、何を申而も日本に數なき大國之
 勢、乍其箬感心仕候。其日土佐に而云へば、御用人位之人壹人用達
 に相成、外に下人壹人御渡に相成候、三時之御賄、本膳晝は焼物斗に而平
 なし、其餘は時々汗平焼物着にして、外輪料理や持參り候、追々下人共之
 嘶に、御家老並之御扱と申事に御座候、右につれ何も自由千萬に御座候。
 暑中には戸口え風爐桶を居へ、日々入湯仕候、此頃に至り夜着等結構御仕
 向に相成、其他金子杯も不自由なき様可申出と、御留守居々懇之噂、天成哉
 神成哉難有事に御座候。右之懸りに而久敷晝夜とも外出せず、日々書見手
 習等に而日を暮居候所、閏八月中旬旬、夜分は往來仕居候邸中之事
 故、門剋四つ限りに付、夫迄は段々奔走し、中平氏にも面會、父上様御志之
 事をも委敷承り大に安悦仕候。過し一むかしに近き乙卯之春、幾千代目

日々書見
 手習

無扶持に
ても舊君
に奉仕度

出度親子之御契約仕、依御慈悲而是迄武門に志を伸ばし日月を送り候上は、親子の中において一點之隔意有間じき譯なれども、畢竟私愚昧を不行届にして、御深慮得伺ひ不盡ゆへ、此度之一條に付思召之程を恐れ憚り、且此頃は數多之海陸を隔て、潜伏之身と成り居候へども、此上は彌異胎同腹と乍恐奉存候間、若も此地にて可然機會に御座候はゞ、御志を抱き快く相働可申候、内之事は俗事萬端宜敷御配意吳々奉願上候。○近頃夜分は長州人之旅宿杯え嘲に参り候、能折柄に而天下之有志は自然と姓名承り、又向原も親敷思ひ貫て、實に會稽之事に御座候。○若しや再歸國相叶不申候共、正義之諸侯を頼候得は、隨分共飢寒之愁は有間じき勢に候。乍併他國之大祿は、譬無扶持無給なりとも、舊君に奉仕度朝夕神佛に誓願つかまつりをりまふたもの事は正義段々相運び候而、私共三人之者を政府一統仕居候、頼母しき事は正義段々相運び候而、私共三人之者を政府一統正義に相片付候迄預け申度、若公様は御言葉も添、小南氏を當御留守居本田

私共の事
を探索

彌右衛門と申人迄挨拶有之候に付、若年月を引候共古郷の水のめ申へくかと相樂居候、是等之事は同志たりとも御口外決而御無用に奉存候。○弘田前年磐之助今は章次と革名、大坂詰之横目に而候所、最初私共之事を頻りに探索仕、今以同様(此節)三人之者得押へ不申に付、役目拜辭等申出居候趣に御座候、大のあほふに而有志之笑ひものに成居候、陸目付横目數々御供に而滯京仕居候所、内には皆同志に而候故、是等にも何も別慮無之候、却而無役之俗人を憚り居候、尤上役に入木五平、柏原内藏馬杯俗物に而、餘程六ヶしき相手と相聞申候、坂本彌助父子には、此事のみならず、惣而之事決而御聞せ被成候事御無用に奉存候。○若此意味折を以弘前杯に語り、追々右章次え聞候へば、忽國家之大事に拘り可申候間、此儀屹度御思慮可被爲在候。○元吉等徒黨之者共、容堂様之思召に而御選出に相成居候故、甚以御惜み深く、奸物と申事も俄に言上しがたく、夫

御政事向
は元吉等
御暗まし
申上

土佐の勤王

六四

故同志の面々至而心痛之趣に候、先年勤王之御志は被爲在候得共、御政事向は元吉等が御暗まし申上居候、誠に恐多き事也。天年御聰明に而、一天下の事は御愚もなく見へさせられ候得共、是迄之御政事は誠以言語同断之事に御座候、雨降て地固ると申候へば行末頼もしく奉存候。殊に當太守様近頃に至り、時勢之事大に歎き遊ばされ、甚御張込宜しきと申嘯承り、乍恐相悦居候。

右跡や先分り兼候得共、御閑暇之節御慰之一端にも相成候はゞやと奉存、拙文を綴り指出し候、返すくも人前御無用に奉頼上候。

十月七日認

第二 武市瑞山と其の餘技

若し武市瑞山先生をして、戊辰間際まで生存せしめたならば、彼は必ず勤王討幕の擧に於て、薩長の諸有志と提携したであらう。但だその場合に於て、西郷、大久保等の諸氏が、薩藩の殆んど全力を擧げ、木戸、廣澤等の諸氏が長藩の全力を擧げ得た如く有り得べき乎。そこは上に容堂公てふ手に負へぬ有力なる藩主を戴き、この藩主は又た土佐人の通有する大なる個性の持主であるから、恐らくはそれ程迄には行かなかつたかも知れぬ。

唯だ瑞山先生は斃れたけれ共、先生の同志は外にしては薩長諸藩の有志と提携し、内には下士、上士相合して遂にその戦功に於て、薩長を凌がざる迄も、殆んどそれと雁行する程の勳を奏したるは、意外の仕合はせと云はねばならぬ。

第二 武市瑞山と其の餘技

六五

瑞山先生はその詩歌及び文章等を見ても、とても學者とは思へぬが、その畫に至つては、天誅組の志士藤本鐵石即ち鐵寒子をして、後へに瞠若たらしむるものがある。その山水は孰れも氣品高く、先生の人品を偲ばすものがある。肖像畫の如きも、獄中に於て水鏡を取りて、自ら寫したりといふ如きものは、寧ろ神品に庶幾きものがある。殊に意外であるのは、その美人畫が巧妙であり、その極彩色のものに至つては、恰も李白の

一枝濃艶露凝香。雲雨巫山枉斷腸。

の思ひをなさしむるものがある。若し假りに先生の名を蔽うて、これを見れば、新に美人畫に秀でたる一家を幕末に生じたりといふ事さへも言ひ得るであらう。

これは實に瑞山先生にとつて、意外の隱藝と云はねばならぬ。予は屢々鐵寒子の

山水を見たが、未だその美人畫なるものを見るを得なかつた。即ち當時畫名天下に噴々たりし、鐵寒子と雖も、この點に於ては、武市瑞山先生に一箸を譲つたものであらう。

第三 中岡慎太郎の時勢論と與同志書簡

世間では阪本龍馬の名は最も轟き、中岡慎太郎の名は一般的には寧ろ知られてゐない。されど薩長聯合の大芝居を打つたのは、彼等兩人の合同事業で、彼等兩人は互に助け、助けられ、缺くべからざる役目を勤めてゐる。固より阪本は勝先生の塾生と云ひつゝも、お客分的の待遇を受け、天下の上游に依つて四方の志士と接觸したから、その名の天下に轟きたるも當然であるが。天

下の大勢を揣摩し、天下の英雄を品隲し、時と人と勢とが相合して、新局面を打出する底の到着點を洞觀し、これに向つて銳進したるは寧ろ中岡の得意とする所で、この一點だけは、或は龍馬と雖も及ばなかつたかも知れない。

今此に彼の『時勢論』なるものと、その同志に與へたる書簡とを掲げて、如何に彼が當時に於て活眼を以つて、時世を見たる乎を示すであらう。

時勢論

一張一弛は治國の要務

竊かに古今宇内の盛衰得失を察するに、一治一亂は勢の止むを得ざるに出づる者也。一張一弛は治國の要務也。非常の難を解く者は、常道を以て見る可らず。抑も和漢古今及び西洋各國其國政の張るや、必ず大英斷を施し大危難を経て、一朝其舊弊を除き、始めて其軍備政教一新見るべく、國體於是か立つ、

久坂義助の説

未だ周旋と議論とに始終して國を興し難を解く者を聞かざる也。世上往々議論周旋する者あり。其言に曰く、皇國一和以て政務を立つる也。武備充實以て國威を張る也。信義以て外國に交る也。議論愈密に、周旋愈極まり。而して未だ其實効を見ざるなり。何にとなれば是れ言ふ可くして行ふべからざるの理あり。抑も癸丑（嘉永六年）以來、皇國一和、武備充實、紛々説あり。始め三港條約の成りし時、久坂義助（久坂元瑞）なる者、「回瀾條義」を著す。其説に曰く、今已に三港定約の成りし上は、廣く有志の士を海外に遣し、西洋諸學諸藝及工商の術を學ばしめ、大に海陸の軍備を張る可し。如此せざれば以て國體を立るに足らずと。其後幕政益々妄行、諸藩日々に因循苟安、曾て其効を見ざるに至る。於是て始めて其言の空論不足施を知り、壬戌（文久二年）の年に至り、義助又「解腕痴言」を著す。其説に曰く、天朝勅諭確々不可不奉と。斷然攘夷の説を決し、曰く苟も吾輩節義を以て天下を動かし、一死以て皇恩

に報い、一朝不測の難を神州に引受け、百戦の危を經、豪傑其間に興るに非れば、何を以て土崩の患を防ぐに足らんと。高杉春風も亦た曰く、今日西洋事情を説き、彼を知るを以て自ら負ふ者纔に西洋の一端を見て、曾て古今盛衰の機の由る所を知らず。當時彼れの盛強なる、最も其本有之、今日我邦に於て彼れの盛なるを學ばんと欲せば、英佛等の未だ盛ならざる時、内戦度々有之し事、又魯西亞百戦危難の中より國を起せし事など斟酌し、手本とすべし。若し我邦今日の弊勢を以て、彼れの盛強文明已に治まりたるを坐ながらにして學んと云は、大間違の極也。故に宜しく奇變英達、實行を以て天下を一新す可しと。嗚乎兩士已に去る。復た兩士に對して今日の事を議する能はず。然りと雖ども幸に其言に因て、聊か今日の活論を助くるに足る。今已に歴觀せし處の一二を證せんに、壬戌（文久二年）の年、薩州の壯士、英夷を生麥村に斬す。其後英軍鹿兒島に入り罪を問ふ。時論多く曰く、薩州大なりと雖ども、英國の力を以

て攻るに至ては、決して支ふ可らずと。然るに此一戦に依て士氣大に奮ひ、俗論漸く沮し、因循苟且の弊漸く破れ、所謂攘夷家なる者も先として航海練兵の實用を主張するに至り、一藩の國是定まれり。又長州にては屢々夷船を暴撃し、甲子京都に敗軍し、續で馬關の大敗有り、又追討の兵を四境に受くる。此時人皆思へらく、防長の滅亡無疑と。豈計らん長州は一國の政事を改革し兵制を一新し、士氣大に奮ふこと、全く此大危難に由て也。又幕府昨年討長の敗軍に人皆思へらく、自今幕府不足恐と。何ぞ計らん幕府海陸兵制の奮ひしは亦た此敗軍の機に由て也。凡機會の間、常眼を以て見るべき難し。如此き活動の機、卓識、英斷並び行ふ。義助（久坂）春風（高杉）の如き非常の士に非ざれば見難き也。然るに天下今日因循苟且の弊、尙未だ其百分の一改まるを見ず。夫の世間因循傍觀、區々として只だ人の失策のみ求め笑ひ、坐して天下の機會を失し、甘じて人の後に落つ。此の如き碌々愚弱の徒、固より論ずるに足らず。其他世

先斷大事者
先忘成敗

に所謂有名の藩なる者に至ては、此理を知り勢を辨ずと雖ども、未だ其効なきは何ぞや。是亦恐くは成敗の間に疑惑し、事に臨で斷ずること能はず。未だ因循苟且の弊を脱せざる也。古人曰く斷大事者先忘成敗と、此實論也。事機の得失、前證の如く、敗素より憂るに足らず。勝却て恐る可きあり。若し此機を知り著眼一定して百敗撓まざる時は、天下萬事成らざるは希也。然るに國に大義あり公道あり、戦求めて得可らず。只管大義を踏み公道を行ひ、一歩も退かざれば不得已の機決、必ず目前に至らん、此れ前件勢を論せざるを得ざる所なり。誠に神州危急存亡、今日に至て極れり。苟も其國民たる者、豈旁觀す可けんや。誠に古人言ふ所の如く邑ある者は邑を擲ち、家財ある者は家財を擲ち、勇ある者は勇を振ひ、智謀ある者は智謀を盡し、一技一藝ある者は其技藝を盡し、愚なる者は愚を盡し、光明正大一死以て至誠を盡し、然後政教立つ可く、武備充實、國威張る可く、信義外蕃に及ぶ可きなり。能く此の如くす

危急存亡
今日に極

れば豈に皇運挽回の機なからんや。豈に外蕃を制するの術なからんや。滿腔の婆心聊か書して知己の士の忠告を待つと云爾。

丁卯(慶應三年)夏月書

與同志書簡

當時洛西
の人物評

西郷南洲

天下の勢變遷不一、有志の眼を著くべき處、果して何處にあるか、都て相分り兼ね候得共、當地邊は四方の人傑往來仕候事故へ、大に時務に後れ不申候。當時洛西の人物を論じ候得ば薩藩には西郷吉之助衛門事爲人肥大にして、後免の要石にも不劣、古の安部貞任などは如此者かとも思やられ候。此人學識あり、膽略あり、常に寡言にして最も思慮雄斷に長じ、適宜一言を出せば確然人腸を貫く、且つ徳高して人を服し、屢々艱難を輕て頗る事に老練す。

木戸松菊

其誠實武市(○瑞山先生)に似て學識有之者、實に知行合一の人物也。此則當世洛西第一の英傑に御坐候。是に次で有膽有識、思慮周密、廟堂の論に堪る者は、長州桂小五郎(○木戸松菊先生)有識有略、兵に臨んで不惑、機を見て動き、奇を以て人に勝つ者は高杉東行、是亦洛西の一奇才、其外諸藩英傑に度々出合仕り、討論仕候事故へ、愚昧の吾々と雖ども、事務の萬一を察知することを得たり。抑も吾々共熟々時勢見聞仕候に、國勢の衰る其來ること遠しと雖ども、近年外夷の事起りしより、天下擾々多難、此時より甚しきなく、且つ夫れ封建の勢たるや、損益相半す。抑も國家苟安三百年、士氣頗る懦弱、上下事を忘れ、加るに封建の勢を以てして、各藩趣向を異にし、一旦強寇大敵卒然我に迫る。於是大命攘夷必戦に出づ。而して天下是を奉ずること能はず。議論百端各異なり、國體於是か不立、是則封建の害ある處なり。而して其論の分る、處、或は攘夷の論あり、又開國の論あり、武備充實の論あり。開國

外夷迫來
國家多難

議論百端
各異なる



富國強兵

の論なる者は、略海外諸國の情實を知るとは乍レ申、大旨苟安偷生の徒、所謂坐上の空論にして頗る人情に害あり。固より取るに足らず。將又武備充實の論に至ては、或は固陋の見にして、事態に暗さあり。又は實に卓識上より出るの英斷あり。然るに其見或は異なりと雖ども、皆以て義を重じ死を輕じ、利害を以て其節を動かさざる輩にして、天下をして慷慨義烈の風を生ぜしむるに足る。而して其固陋に出づる者に至ては、氣を負ひ敵を侮り、若し一敗する時は、或は惑ふことあり。其大卓識の者に至ては機に臨み勢に達し、百折千挫すと雖ども不惑、何ぞ一二破敗を患へんや、可戰可開可鎖、皆權我に在て、而して其兵權なる者は武備にあり、其本は士氣にあり。故に卓見者の言に曰く、富國強兵と云ふ者は、戰の一字にあり、是實に卓見にして、千載之高議、確乎不可移、則知る能く事に處する者、且つ和し且つ戦ひ、始終變化無窮極者也。吾嘗て此論を得て未だ自ら信せず。今にして其實に確論たるを知る、何ぞや丑

年(○嘉永六年)以來、天下を救ふ者は悉く暴客の大功也。是れ暴客と雖ども、其實大抵大卓見有て、然る後能く斷ずる者に似たり。嘗て水藩の暴舉壬戌(○文久二年)の勢を醸し、薩州の暴客生麥に發し、長州は馬關に暴發、且つ屢々兵を内地に動し、其跡或は無略に似て國に益なきこと有りと雖ども、時勢一層々々に運び、遂に天下を干戈の世となし、自藩をして不可逃の死地に入れ、天下大有爲之基本始めて立つ、是則神鬼に通せざる者能く知る所にあらず。第一其卓識なる者を久坂玄瑞と云ふ。此人嘗て吉田寅次郎門弟にして英學も少々仕り、夷情も大に知れり。此人常に論じて曰く、西洋諸國と雖ども魯王ベートル、米利堅ワシントン帥の如き國を興す者の事業を見るに、是非百戰中より英傑起り、議論定まつたる者に非らざれば役に立たざる者なり。是非共早く一巨戦争を始めざれば、議論斗になりて事業は何時迄も運び不申と云ふ。實に名論と相考申候。今其證據と云は大個條二つ有り、一は生麥の舉なり。是は不斗

卓識の久坂玄瑞

一は薩州の事

一は長州の事

の事と雖ども其國に益あること實に夥し、是より亥七月鹿兒島の戦争を引出し、一巨の和は心外なれども、薩藩の起りしは全く此戦争に基く。是よりして一國大憤是非々々此大耻を雪ぐと云ふ者にて人材登用武備充實の論となり、西郷吉之助を島より取出し、忽ち執政の場を預けられ、其他三州の中にて人材たる者あれば輕輩にても執政にすると云ふ國論定まり、海陸の實備日々に出來、國政も大に一新し、實に目を覺し申候。又一ヶ條は長の事也。馬關の戦を開き、京師變動を生じ候より、内外の大難一時に迫り、外は夷に和し、内は天下數萬の兵軍を引受け、遂に内輪の戦迄に至り候得共、小五郎東行の如き、昨年英より歸りし井上聞多、伊藤俊助等の如き者、國君を輔佐し、所謂宜きを得候より、國論大に一定し政事益々一新し、二國の人民悉く必死不逃の地に入り、於是士氣益著實に赴き、武備日々に整ひ、此頃は議論なくして實行と相成り、悉く國中の大勢を一新し、砲銃の隊而已になし。銃はミネホール、砲は本

薩長兩藩の將來
大基本を
立つるの
急務

込めちやうだまなき 込長 玉等にして兵制全く改まる。又騎馬隊も頗る盛なり。國中に毎日大隊調練有之、先づ一日に大抵四十六隊位は發砲絶ゆることなし、實に其勢不可當。此一事は全く戦争の功にして、他藩にして如何様に仕度ても出来ぬことに御座候。薩と云へども是に於ては閉口せざるを得ず。且國內諸處に水車場を築き、砲銃を製し、ミネヘールも日々に製し、海軍も大に盛にせんとす。右の通り兩藩の實地に運候は、全く戦争の功にして卓見家の事業如此、自今以後天下を起さん者は、必ず薩長兩藩なるべし、吾思ふ天下近日の内に二藩の令に従ふこと鏡に掛て見るが如し。而して他日國體を立て外夷の輕侮を絶つも亦此二藩に本づくなるべし。此又封建の天下に功ある處也。又士氣と武備と如何程盛に相成候とも、國體立ざれば敵國外夷を待つ所の所以に非らず、且つ國の大體は何を以て本とするや、吾曰く内名分大義を明かにし、祭政一致、教と共に皆朝廷に歸し、天下の大基本を立つるを以て急務とす。實に今日の如きは天下

御活論御
雄斷有之
度

の大機會にして、上下勉強し候得ば、害を轉じて福となさん、今日の敵國外患他日より見候へば、天下の名炎と相成候へば實に天下の大功之に過ぎ不申と奉存候。然るに元弘の事杯思合候得ば、中々上下共一通りの艱難にては思も寄らぬことに御座候。何分共時務の變に御先立被成御活論御雄斷有之度、實に此節は最早田舎の迂濶先生に偶々逢ひ、時勢に後れ候論承候ては、何とも氣の毒にて候間、諸君井蛙の見に御落不被成様遙に奉祈候。其他可歎可悲事如山御座候得共、今更一言不仕申、只々老婆心の様なること思出し次第に亂筆仕候。取急候間、清書不能、御推讀奉願上候。不宣。夜已に四更。

第四 阪本龍馬の人物

阪本龍馬は土佐人としても恐らくは日本人としても、桁のはづれた漢であつた。彼は維新後に生存したりとて、固より廟堂に立つべき漢ではなかつた。恐らくは彼にして在りしならば、三菱會社の事業は彼に依つて創始せられ、彼に依つて經營せられたであらう。

彼は曾つてその部下である海援隊中の人々を品臨して曰く、

『今日兩刀を脱し去りて飯の喰へる漢は自分と、陸奥陽之助あるのみ』

と。これは予が親しく故陸奥伯から聞いた話だ。彼は海援隊の當時から、已に海

運業の事を心掛けてゐた。唯だ彼が一個の商人として成功するを屑とせず、その海運業を以つて世界に雄飛せんとしたる事は、これを察するに難くあるまい。

沼山津に於て彼の往訪したる際に、横井先生が彼に向つて、

『子冀くは亂臣賊子となる勿れ』

と云つたのは、或る意味に於ては龍馬の知己の言と云はねばならぬ。横井先生をしてそれ程迄に心配せしめた龍馬の底止する所を知らざる、勇往邁進の氣魄と策略とは、實に當世一品と云はねばならぬ。阪本龍馬にとる所は、その思想とその實行との間に寸分の距離を置かなかつた事だ。

第五 阪本龍馬と薩長聯合

彼は思ふ所あれば直にこれを行ひ、又た他をしてこれを行はしめた。薩長聯合もその通りだ。薩長兩つながら難物だ。しかもその代表者たる西郷も木戸も、異つたる意味に於て、なか／＼手に負へぬ難物だ。然るに厭がる木戸を遂に京都まで引張り出し、しかも要領を得ずして歸へらんとする木戸を引留め、手に負へぬ西郷をして、木戸に向つて握手さすべく手を差出さしむるに至りたる、到底人間業とは思はれぬ程の仕事だ。

しかも薩長聯合既に成り、討幕の密勅は將に其の降下を申請せんとしたるに關らず、更に平和的解決を以て此の局面を了せんと企て、後藤をして二條城に於ける

一大活劇を演せしめたるに至つては、奇策深謀愈々出て愈々量るべからずと云はねばならぬ。

抑々阪本龍馬は九分九厘まで武力解決の幕が開かるべく、狂言が仕組まれたるに關らず、彼等をして尻餅をつかしむる程の、此の最後の一幕を演じたのは、何故であつた乎。

第一、彼は幕府陸海軍の力を過信して、力を以つて争つても、その目的を達し得ずと信じたるが爲乎。恐らくは左様ではあるまい。彼は幕府の長州征伐に於て、既に幕府の實力を試してゐるから、左様に高く買ひ被る筈はあるまい。

第二、薩長は全力を以つてし、土州は到底容堂公が上に在るからには、その全力を動かすことが出來ず。されば武力的解決では土州は落伍せざる迄も、到底薩長の下

につかざるを得ざる次第なれば、寧ろ此に薩長二藩の企て及ばざる大芝居を打つて、彼等が開いた口がふさがらない程の局面を開展しようとして企てたのではなかつた乎。萬一それが出来損なへば、その時こそ大義名分明となつて、容堂公とてもその時は討幕に左袒するに至るべく。されば此の平和的解決の芝居が首尾克く行けば、大極上々。行かざるも亦た土藩の勢力を擧げて、薩長と共に討幕に従事する機會を作る事が出来るとの目算ではなかつた乎。或は薩長合同の力を以てすれば、幕府を強制して政權を返上せしむるに足る。所謂戦かはずして勝は勝の上なるものなりとの意味にて、その案を出したる乎。

第六 阪本後藤策動の歸結

兎に角此の芝居は阪本と後藤との仕組みたるものにて、彼等は此の平和的解決の爲には、彼等自身の命を抵當とするも敢へて辭しなかつた。その模様は後藤と阪本との取合ひの書翰がこれを證明してゐる。慶應三年十月十三日附にて、阪本龍馬は實に左の如き書翰を後藤に送つた。

御相談被遣建白之儀萬一行はれされば、固より必死の御覺悟故御下城無之時は海援隊一手を以て大樹 參内の道路に待受、社稷の爲不戴天の讐を報じ、事の成否に論なく、先生に地下に御面會仕の○草案中に一切政刑を擧て朝廷に歸還し云々、此一句他日幕府よりの謝表中に萬一遺漏有之歟、或は此一句之前後を交錯し政刑を歸還するの實行を阻障せしむるか、從來上件は鎌府已來武門に歸せる大權を解かしむる之重事なれば、幕府に於てはいかにも難斷の儀なり。是故に營中の儀論の目的唯此一款にあり。萬一先生一身失策の爲に、天下の大機會を失せは、其罪天地に容るべからず。果して然らば、小弟亦薩長二藩

の督責を免れず。豈徒に天地の間に立へけんや。

十月十三日

後藤先生 左右

龍馬

而して後藤は又た即時に左の如き返信を認めた。

華書拜披、於僕萬々謝領す。文中政度を朝廷に歸還云々之不被行時は勿論生還する之心無御座候。併今日之形勢に因り、或は後日舉兵之事を謀り、飄然として下城致哉も不被計候得共、多分以死廷論する之心事若僕死後海援隊一手云々は、君之見時機投之に任す。妄輕舉勿破事已に登營程度に迫れり。大意書之奉答。頓首。

十月十三日

坂本賢契

後藤元燁

斯くて後藤等は二條城にて將軍慶喜に謁見した。

即ち薩藩の小松帶刀、土藩の後藤象二郎、福岡藤次、藝藩の辻將曹等であつた。

その結果は即ち左の通りであつた。

唯今下城、今日之趣不取敢奉申上候。大樹公政權を朝廷に歸すの號令を示せり。此事を明日奏聞。明後參内勅許を得て、直様政事堂を假に設け、上院下院を創業する事に運べり。實に千載之一遇、爲天下萬性大慶不過之此段迄不取敢奉申上候。勿々頓首。

十月十三日

才谷梅太郎様

後藤象二郎

才谷梅太郎とあるは、阪本龍馬の變名である。斯の如くにして武力的解決派は、全く失敗し、平和的解決にて諸事を了せんとした。

然るに豈計らんや武力的解決派は徳川慶喜政権返上の當日に於て、討幕の密勅降下を願下げんとは。而して折角の平和的解決も、遂に武力的解決の爲に乗せられて、畫餅となつた。しかもその事は事の成否如何を見ずして等しく同志でありつゝ、一方は平和的解決の爲に、一方は武力的解決の爲に働きたる阪本、中岡兩士も、遂に慶應三年十一月十五日の夜、刺客の刃に斃れた。

昭和四年六月十一日 民友社に於て

蘇峰老人

土佐の勤王終

昭和四年六月廿五日印刷
昭和四年六月廿九日發行

土佐の勤王 奥付

定價 金六拾錢

著者 徳富猪一郎

株式會社民友社代表

發行者 矢野國太郎

東京市京橋區日吉町二〇

印刷者 渡邊安雄

印刷所 民友社印刷所

東京市京橋區日吉町一〇

不許複製

發行所

東京市京橋區
日吉町二十番地

株式會社 民友社

電話銀座 二三四〇〇番
振替東京 一三一〇〇番

經行

月

丈

指

不
得

大
理
國
太
源

全
國
金
六
仙
銀

土
道
心
銀
王

國
際
四
季
六
月
廿
五
日
開
辦

